

丁文江と竺可〔テイ〕：  
中国近代地理科学の成立過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒井, 正一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/973">http://hdl.handle.net/2297/973</a>

## 丁文江と竺可楨

— 中国近代地理科学の成立過程 —

駒井正一

### はじめに

さきに、筆者は「竺可楨の物候思想の源流とその背景」(1998)において、竺可楨の物候学的思想とその形成および竺の研究の姿勢を中心に、主として、竺の日記や書簡をもとに検討を加えた<sup>1)</sup>。そこでは、竺可楨の研究生生活は、前半は抗日戦争の時期とまた晩年は文革の時期と重なり、その大半が困難な状況におかれたが、竺は物候や気候変動、科学史などの分野での研究を積極的におし進め、中国の近代的気象学や地理学の基礎を築いたことを考察した。

竺可楨は、抗日戦争期には浙江大学の校長として熱心に教育活動も行い、有能な地理研究者を数多く育てた。また、中華人民共和国成立後は、竺は中国科学院や地理研究所および地理学会の組織化や近代化にも大きな役割を演じた。たとえば、1960年1月に開かれた“全国地理学術会議”において、中国科学院副院長で地理学会の理事長でもあった竺は、会議への提出論文と討論を総括するとともに、当時の中国地理学の傾向を指摘し、新しい地理学への転換を訴えている。会議に提出された論文は、中華人民共和国成立後の中国地理学の特徴を反映しており、320余篇の論文のうち自然地理学の論文がなお2/3を占めていた。竺可楨はそのなかでも、熱帯作物の北限の延長の研究や微気候のコントロールの試

みを「気候学に新しい生命を賦与した」と評価し、学界における新しい分野の開拓にはおおいに期待し、援助を惜しまなかったのである。つねづね竺は「解放前は微気候学は空白であった」<sup>2)</sup>とみており、景観や動物地理など中国の地理学界での“弱い環”をいかに育成するかに腐心していたのである。会議では、その後の指針の一つとして、竺は「工欲善其事、必先利其器」との言説をとりあげ、中国の地理学が古い体質を脱し、定性的・定量的分析の方法を強めるとともに、地理学は基礎科学であって先端科学ではないにしても、今後は特殊な需要に応じることができる機器や設備を作っていくことを提案した。紆余曲折があったとはいえ、中国における近代地理学の基礎が確立した段階においても、竺可楨は、なお地理学の変革をめざしていたのである。

一方、丁文江は“五四”以来の学者のなかでもっとも責任感のある“行動の巨人”とよばれている。丁は章鴻釗や翁文灝らとともに中国の地質学の先駆者の一人であり、また、地理学に対する貢献も大きい。

丁文江は1911年にイギリスのグラスゴー大学を卒業後、簡旧の錫採掘の探査や東川銅鉱での地質図作成に携わるなど雲南でのフィールド調査の活動を経て、地質研究所での研究生生活を送っている。丁文江の最初の研究報告書は、当時の山西省の直隸(現河北)省との

境界，正太鉄路沿いの地質調査にもとづいた1914年の梭爾格と王錫賓との共著「調査正太鉄路附近地質礦務報告書」<sup>3)</sup>であり，翌年の“Tungchwanfu, Yunnan, Copper Mines”から徐霞客研究をへて，最後の地質学的論文となった「雲南箇旧附近地質礦務報告」まで，丁文江の生涯における研究の中心は，実践的な鉱務地質調査にもとづく地層研究に置かれることになる。正太鉄路沿いの調査には，外資による井陘炭鉱開発の基礎調査も含まれていたが，当時の地質調査は外国の技術や指導体制を受け入れなければならない事情があった。梭爾格とは，北京京師大学堂の地質学研究者のドイツ人ゾルガー (F.Solger) である。このようななかで，丁文江は外国の近代的地質学や調査の方法などについて，多くのことを学んでいる。1931年から1934年までは，北京大学で地質学の教授を務めた。かくして，丁文江は地質学の研究者であり教育者でもあったが，南京の中央研究院院長の蔡元培は，丁が地質研究所在任中に北票煤礦会社の総経理を担当するなど機関運営の実務経験も豊富であったことをみて，研究院の総幹事として招聘した。丁文江もまた竺可楨と同様に，中国近代地質学の基礎を築き，学会の組織化に大きな役割を演じることとなる。そして実際にも，丁は竺可楨とは，研究者としても学会や研究機構の組織者としても，親しい交流を深めていくことになる。

丁文江は49歳の若さでこの世を去る。死因は睡眠中の石炭ガスによる“一酸化炭素中毒”死であった。1935年12月，丁は鉄道部の委託によって，湖南省の湘潭炭鉱の探査と湘潭衡山の地質調査に従事していたが，8日に衡陽で事故に遭い，翌1936年正月5日には還らぬ人となった。このように，丁文江は早逝した

が，地質学の分野で大きな足跡を残し，多くの後継者を育てている。1993年には，丁の生誕105周年を祝賀して『丁文江選集』が編集，献呈された。これはまた，中国地質学会成立70周年を記念した出版でもあったのである。

本稿では，地質学者丁文江の研究生活および丁と気象学・地理学者竺可楨との学問的交流を軸に，彼らと邂逅した研究者の群像や中国の近代地理学およびその関係諸地理科学の成立過程にあらわれたいくつかの問題について検討する。

## I 中国近代地理科学および学会の創成期

中国地質学会は1922年に北京で成立している。丁文江は章鴻釗を主席とする5名による設立準備委員会を組織し，創設会議の議長を務めた。丁は学会発足の趣旨について「中国の地質科学工作者は，このような学会の必要性を感じており，この成立によって意見の交換を実現し，それぞれの仕事に対して評論を提出し，今まで無関心であった状態を一掃する」とのべている。創立メンバーは26名から成り，章を会長に選出し，丁は評議員，編輯主任として学会を支えることとなった<sup>4)</sup>。

中国地理学会の発足は，地質学会にくらべほぼ11年ほどおくれた。竺可楨は地質学会の成立にも寄与した翁文灝や張其昀とともにその発足準備に奔走したが，1933年の中国地理学会の組織化にあたって3名の共同で「中國地理學會發起旨趣書」を公表している。その冒頭では「近年の學術の趨勢は専門を尊重しているが，中国の従来の地学というのは，もともと“天(の)時，地(の)利，人(の)和”の三方面を含んでいる。現在では“天時，地利”にはおのおの(それに対応する)専門的思想があり，先鞭をつけるのを競い，先を

争って先頭に立とうと努力している。測天の学者にはすでに中国気象学会の組織があり、括地（地を包括する）の学者にはすでに中国地質学会の組織があるが、天時、地利を基礎とし、人文を重視する学者には、きっちりとした団体がどうしてもなければならない。気象および地質と鼎立して三者がともに肩をならべ、中国の地学研究の大任を果たさせるのが本会発起の趣旨の一つである」<sup>5)</sup>とのべている。つまり、従来の天時、地利、人和のすべてをカバーする伝統的な“地学”の総合的・伝統的発想と、新しい専門的領域としての“地理学”の発想との違いを簡潔に指摘しつつ、中国の近代地理学の発展のために、中国地理学会の設立を宣言したのである。このほか、竺可楨らは地理学会設立の理由に「地理学の内容は気候学、地文学、地図学、生物地理、人文地理の諸部分を含み、地理学者が応えるべき工作は、じつに筆紙に尽くしがたいものがある」こと、「最近、各大学が多くの（地理学関係の）専門系を設立し人材を輩出しているが、すべての地学団体は、やや一部の地域に偏っていると思われ、いまだ全国に広まることできない。...われわれは、中国の地理学者が一堂に会して、たがいに討論をする必要を強く感じている」<sup>6)</sup>ことなどをあげている。1934年2月、中国地理学会は竺可楨や張其昀らの主導のもと翁文灝を会長として、40名の創立会員で発足した。

なお、ほぼ同時期の1934年、譚其驥は顧頤剛らとともに、中国で最初の近代的歴史地理学、人文地理学研究のための学会「禹貢学会」をたちあげ、『禹貢』半月刊を創刊している。彼らはもともと北京大学をはじめ燕京大学や輔仁大学で、旧来の学問体系にもとづいた中国地理沿革史を講じていた。記念すべき『禹

貢』創刊号の発刊の辞は、譚其驥が書いた草稿に顧頤剛が手をいれて作成したものである。そこには「地理的沿革を研究することは、先の清代にはさかんに行われたのであるが、最近十数年間はこのやり方はすっかり衰えている。...われわれは一連の歴史学徒であり、地理にもたいへん興味をもつものである。...

『禹貢』は中国地理沿革史の第一篇であり、われわれの仕事の意義を表すにもっとも簡単で、はっきりしている。そのため、この題を借りて、われわれの学会とその刊行物に名づけたのである」<sup>7)</sup>とある。のちに『復旦学報社会科学版』の1980年度増刊として出版された「歴史地理專輯」号には、譚其驥の序言が収録されている。譚其驥は「禹貢学会」が従来の沿革地理を改め、歴史地理学を建設していくことを中心任務にしていたことを強く意識していた。譚によれば「いわゆる“地理学”は一般にみな、歴代の疆域政区に限定されるか偏っており...旧時代、実際には歴史学の補助学科としての沿革地理学でしかなかった」<sup>8)</sup>のである。

一方“最高学術機関”としての中央研究院は、1924年には設立の構想がもちあがっていたが、1927年の中央研究院設立準備委員会の開設をへて、翌年制定の「国立中央研究院組織法」にもとづき、ようやく発足している。蔡元培が研究院院長になり、地理学会からは翁文灝（評議会秘書）や張其昀が、胡適らとともに重要な指導部として参画した<sup>9)</sup>。

1929年には中央研究院に気象研究所が開設され、竺可楨が所長に任じてからは、気象研究の重点が南方に置かれたため、研究所もまた南京に移された。中国気象学会は1924年にすでに、蔣丙然会長、竺可楨副会長の体制で旗揚げしている<sup>10)</sup>。しかし、抗日戦争の時期

には、気象研究所と中国気象学会は移動を余儀なくされ、まず南京から漢口抵渝へ、ついで重慶北碚に移っている。当初研究所は通遠門興隆街に事務局を開設したが、ほぼひと月で曾家岩の“隠れ家”に引っ越した。その後曾家岩にはさまざまな機関が移ってきたため、1939年5月には、研究所はふたたび重慶北碚に戻らざるをえなかった。このように、中国の近代地理学の関係諸学会は、気象学会のように、結成後間もなくその成長過程において過酷さを強いられ、困難な状況におかれることとなった。

抗日戦争期には、国民政府が首都を南京から“陪都（仮首都）”としての重慶に移したように、多数の学会や研究機関および大学はその施設やキャンパスを移転しなければならなかった。日本軍の侵攻によって、重慶に移動を余儀なくされた研究機関は、中央研究院や地理研究所をはじめ、地質調査所、農業実験所など10余にのぼる。抗日戦争期のこれらの研究機関の移動は「中国現代史上、規模広大でかつ壮観の西遷運動」<sup>11)</sup>であるとも称されている。中央研究院を中心とする西遷運動の一般的なパターンは、北京や上海などの“中央”から、武漢（湖北）をへて、長沙（湖南）、雲南、貴州、四川へ分散・移動するものであった。竺可楨が所長となった気象研究所はもっとも早く四川に“到達”した組織なのであった。

李四光を所長とした地質研究所の場合、中央研究院から突然「現在の状況は緊急を要している。鷄鳴寺（研究所の仮住い）はすべて南京防空司令部に徴用されてしまった。各研究所は三日以内に全部引っ越し、時間が過ぎれば出入りは許可しない」<sup>12)</sup>との強力な命令を受けている。事態は慌ただしく、限られた

短い時間での作業が要請されたが、所員の過半数はフィールドに出ていたにかかわらず、研究所は廬山への移転を完了した。李四光は事態を予測しており、前もって廬山付近への移動を準備していたのである。

のちに“西南聯合大学”に参画した南開大学は、すでに1936年には重慶に分校や中学（南渝のち私立南開に改名）を開設している。とくに、校長の張伯苓は国共合作や抗日民族統一戦線の形成に力を尽くした<sup>13)</sup>。重慶には、復旦や中央、交通、陸軍などの大学や中央研究院、南開経済研究所などの機関がやむなく疎開をした。市内中心のほか沙坪壩や北碚などの地区に比較的多くの施設が集中したため、現在では“永遠の陪都重慶”として歴史的・文化的遺産の観光資源として見直す地理研究者もいる<sup>14)</sup>ほどである。

1937年7月の廬溝橋事件発生後、蒋介石は各界の著名人をよび、廬山で国是問題の談話会を開いている。北京・蔣夢麟、清華・梅貽琦および南開・張伯苓の各大学校長も参加し、李書華や潘光旦など北京、天津の教授陣21人が連名で“国土を守り、敵と戦う”ことを呼びかけた。しかし、まもなく南開大学のキャンパスの大部分が破壊されるなど、各大学とも研究や教育を維持できず、また、入学試験の時期にもあたっていたため、移動を決意したのである。9月には、国民政府教育部は北京、清華および南開の各大学を一時的に統合する“長沙臨時大学”の設立をとりきめた<sup>15)</sup>。3大学の既存の学系は17の系に再編され、地理科学関係の専攻は北京大学の地質系と清華大学の地学系（地質、地理および気象学の3組で構成）とが合併され、理科のなかの“地質地理気象学系（主任教授 孫雲鑄）”として一つにまとめられている。翌1938年には、大

学はさらに雲南（昆明および蒙自分校）へ移動せざるをえなくなり“西南聯合大学”と改称し、地質地理気象学系は“理学院”のなかに組み込まれた。系の教官の層はとくに厚く「わが国科学界の名士が多い」<sup>16)</sup>との評価があった。

ところで、1931年の“九・一八（柳条湖）事件”のあと、国民党内部の愛国民主を提示するグループの陳立夫や張道藩らは、五四運動以来ふたたび“科学救国”を主張し、中国科学化運動の発起人となった。翌年11月には、中国科学化運動協会が南京で成立している。発足したばかりの中国地理学会も“科学救国”の道を選択した。陳立夫の影響が強かった張其昀は、学会の幹事に就任し「中国の地学の人材を網羅し、學術救国の信念を樹立しなければならない」<sup>17)</sup>とのべている。中国科学化運動の基本的原則には、近代科学の知識と方法を活用して、生産や生活の諸問題だけでなく、一方では、国防の問題も解決し“中華民族”復興も目標に掲げられたため、国防科学の確立の要請ももちだされた。蒋介石によって国防設計委員会が設けられ、のちに“科学で身を装った”強力な管理機構としての資源委員会に発展していったのも、いわば必然的な成り行きであった。

国防設計委員会委員長は蒋介石が兼務し、翁文灝が秘書長、錢昌照が副秘書長となり、40数名の委員のうち呉鼎昌や張嘉敖などの金融企業で活躍するメンバーのほかは、大多数が胡適や傅斯年らの知識分子で構成されていた。たとえば翁の場合、清華大学教授のほか政府經濟部部長と資源委員会主任委員を兼担するなど、彼らはなんらかの形で国民党の政権に関わっていたため、国民政府の“諍友（諫め忠告をくれる友人）”<sup>18)</sup>ともよばれていた。

丁文江もそのなかに数えられていた。しかし、もともと蒋介石から“原料および製造分野”での参加を説得されたとき、翁は「私はずっと地質学の仕事をしてきたもので、政治のことはわからない。だが、私はどうして国家はみな自己の領土を保全しなければならないのかはわかっている。いつまでも妥協をかけあつてばかりはできない」と応え、丁もまた国防設計委員会に加わったあと『獨立評論』を創刊し、「われわれの唯一の活路は、われわれの力量を尽くして抵抗することである」<sup>19)</sup>などと蔣の弱い姿勢を批判し、抗日の戦いをよびかけたのである。

1944年3月、重慶の国民党中央図書館で、中央研究院評議会の第2回第2次年会が開催された。国民党側からは陳立夫や何應欽、呉鐵城などの要人が参加し、竺可楨も李四光や汪敬熙らとともに研究院の評議員として出席した。評議会の秘書として、翁文灝がこの会議を進行させた。議論は中国の独立した科学体系をどのように創りあげていくか、あるいは当面の理論的科学と応用的科学との関係はいかなるものかなどに集中し、中国の勝利がほのかに見えてきた状況を反映していた<sup>20)</sup>。竺可楨は会議に参加するにあたって、浙江大学の移転先貴州遵義から汽車に乗って重慶にきたが、「道中天気はすこぶるよく、先月12日以来の一番の晴天であった。貴州はまだ冬の季節ではあるが、花椒坪をちょっと過ぎてから新駅までは、柳がすでにわた糸を垂らし、スモモもみな開花している。江（蘇）浙（江）の清明の（頃の）ようである」<sup>21)</sup>と日記に書き留め、まもなく大学の戻るべき場所に思いを馳せている。

## II 『中華民國新地圖』の編纂

丁文江はさまざまな地質調査とともに、研究や生活の実用面で必要な地質図や地図の作成など基本的な図幅の作成にも労力を惜しまなかった。1924年からは全国100万分の1地質総図の一大測量を開始している。結局、全国図幅を完成することはできなかったが、全国を経度6°緯度4°の国際標準にもとづいて50余の図幅に分け、まず「北京済南図幅」から出版を開始した。また、上海申報館の成立60周年を記念して、1933年に完成、出版された大型の著作『中華民國新地圖』は、翁文灝との共編によるものである。そのころ、北京の地質調査所には、各省の地形図や地図編纂のための基礎資料が多数所蔵されていた。丁文江は北京大学の教授として勤務しており、主として『中華民國新地圖』の編纂にあたったのは、地質調査所の所員の曾世英であった。しかし、丁は地図の編集の方針や方法についていろいろと意見や指示をだし、従来の形式を打破しようと試み、分省別地図の形式にとらわれず、等高線を用いて縮尺200万分の1に統一した当時としては画期的なアトラスを完成している<sup>22)</sup>。『丁文江選集』の編者の一人黄汲清はその序のなかで、丁文江が地図の編纂にあたり、縮尺を統一して等高線を用いるとともに着色もほどこした点を高く評価し、「地理学会での先例のない大著であり、とくに（中華人民共和国の）建国以後も、各方面での建設に必要な参考地図とされている」<sup>23)</sup>として、『中華民國新地圖』の意義を捉えていた。1934年に丁文江は翁文灝、曾世英とともに、大判であった『中華民國新地圖』の図を縮刷し『中國分省新圖』として出版した<sup>24)</sup>。曾世英の直接的指導のもとに、実質上の地図作成にあたった地質調査所の史量才が、その

序で学校、青年と一般国民にむけて供したとのべているように、図が小さくなり、若干表示も簡略化されたりしたが、価格も抑えられ、普及のためにおおいに力を添えた。版を改めるにあたり、新資料にもとづいて地形の修正や地名表示の追加などが行われ、信頼性が増している。1937年には、竺可楨や丁文江らの奮闘により、地図作成分野でも“ヨーロッパ、アメリカの先進”に追いつくために、急遽「中國地形圖編纂會」が設立された。“國難驟發..財力不敷..人才無法羅致”のなか『中國分省新圖』の第4版も、原図の増訂や工場における印刷工程での指導面において「中國地形圖編纂會」の援助<sup>25)</sup>をえて、実現することができた。『中國分省新圖』では『新地圖』同様、丁文江自身が「再版中國分省新圖序」を書き「地図（の外に）説明があるのが、中国の古い地図の特色であったが、世界で通用している地図には（それは）ない」として、中国の旧来の形式を打破した“世界標準”の地図であることを明示した。『中國分省新圖』では、史量才が「中國分省新圖序」の執筆したほか、翁文灝が「中國分省新圖第三版序」を、曾世英が「四版自序」を担当し、編纂者と地図制作の実質的責任者のすべてが、それぞれの意見や地図制作の学識を表明したのである。

竺可楨は『中華民國新地圖』および『中國分省新圖』の出版にあたって協力を惜しまなかった。とくに、第3版の印刷前には、積極的に資料を提供したり、誤謬の訂正を申し出ている。これらの地図の「氣候圖」のうち「中國氣候區域圖」は竺と涂長望による区劃図であり、1月・7月・前年雨量などの雨量および平均年較差や平均最高温度・最低温度などの温度の統計資料は、竺のほか呂炯や張寶堃の作成資料、中央研究院氣象研究所の報告に

もとづいていた。史量才は現実の“神州（中国）”が「風雲變色……長城壞矣，國運如綫」などと荒廃するのを見るにつけ、竺可楨や丁文江、翁文灝、曾世英らの支援によって完成した地図には、勝利を信じ「敬語讀者，其各脩乃知能，淬乃心志，吾中華民族精神，一日不死，則必有還我河山之一日」などとの思いをその序によせている。この地図は国内外からも注目され、胡煥庸や張其昀のほか G. B. クレッシーなどから相当の評価を受けた。竺可楨は日頃丁文江の地図を活用していたようで、浙江大学の貴州移転時代の1939年3月に遵義から重慶に向かったおり、竺の日記には「遵義は丁文江の地図によれば、高度860m前後である。ここから北に向かってだんだん高くなり、婁山関では1,245mになる。それで、遵義を離れてからは、すぐに雲の中である」<sup>26)</sup>と記されている。

中華人民共和国成立直前の1948年には、曾世英、方俊によっておもに地名の増訂が施された<sup>27)</sup>“最終版”「(国内革命戦争)戦后訂正第五版」が出版されている。また、二つのアトラスは、ともに中華人民共和国成立後もしばらくは、地理研究のみならずインフラの建設などの参考として実用的な面でもおおいに利用された。のちの1950年6月に、中国科学院地理研究所の設立委員会が発足しているが、竺可楨とともに曾世英、方俊もまた委員17名のうちの重要な人物であったのである。

1939年、曾世英が『中國分省新圖』の「四版自序」において“國難驟發”のなかにあるとのべたように、中国の国情は悪化し、都市の財力も乏しくなっていた。また、農業恐慌ともいうべき状況にあって、農村でも過剰人口を支持することが困難であったため、丁文江は地質学の研究を進めるかたわら、呉景超

や胡適らとともに“獨立評論派”に属して論陣をはり、工業や都市の発展が農村を救済すると主張した<sup>28)</sup>。胡適や翁文灝など丁文江の友人は、丁がつねづね「政府を為す者は良心および愛国心の好人でなければならない」と主張していた<sup>29)</sup>という。これは“好人政府”の思想ともよばれ、丁文江によれば、好人とは、清廉潔白および品格向上に心掛ける人であった。

### Ⅲ 研究者丁文江と淞滬商埠督辦公署總辦

1926年、丁文江は浙閩蘇皖贛聯軍總司令の孫傳芳の命令で設立された淞滬商埠督辦公署の總辦（総裁）となり、上海龍華に赴任している。上海は翌年の1927年に、淞滬商埠督辦公署の所轄地域と周辺の閘北市や蒲淞市、引翔郷や法華郷など30もの市と郷を管轄し、国民政府直屬の市となり、1928年には上海特別市として近代的都市の道を歩むこととなる。上海に対しては、発布されたばかりの特別市組織法が適用され、市内が17からなる区に画分された。旧淞滬商埠督辦公署の所轄地域をはじめとする上海市中心部の区は「淞滬十一区」として通称だけが残った<sup>30)</sup>。じつは、淞滬商埠督辦公署の所轄地域に閘北市や引翔郷などの江蘇省公署管轄の市郷を取り入れたのは、丁文江の上海赴任の最初の仕事<sup>31)</sup>であったのである。淞滬商埠督辦公署と江蘇省公署がアメリカ留学組の鉅務専門家の徐韋曼を上海県の知事に任命したあと、丁は淞滬商埠督辦公署主管の大部分の人選を進め、体制を固めた。そこには、研究者丁文江として近代化推進の意図がこめられ、その多くは知識人や専門の技術者および外国留学経験者によって構成されていた。たとえば、工務處長にベルギー留学組の技術者程文勛（のち運河工程局

長)を、衛生局副局長にアメリカ留学組の公衆衛生学研究者胡鴻基(のち上海市衛生局長)を充て、事務長や課長クラスにもドイツ留学組の水利工学研究者鄭肇經(『中国水利史』の著者、のち青島市港務局長)やアメリカ留学組の技術者李昌祚(のち江蘇水利局長)など有能な専門家を配している。また、丁文江は在任期間中に税収の整備や新しい簿記会計の制度を導入し、租界の司法権を取り返している。丁は外交部交渉員を派遣するなどして、租界当局と諸外国の上海領事団と粘り強く交渉や協議を重ねた結果、1926年8月には「上海會審衙門收入回暫行章程」が成立し、中国政府は租界内に臨時法院を開設した。これには「丁文江は“真の愛国者”である」などと新聞の社説の記事に掲載されたり「わが国の司法史上、記録にとどめられる重要な1ページである」との評価<sup>32)</sup>も与えられた。このような評価がある一方で「短命にして終わ」ったこと<sup>33)</sup>や丁が軍閥に後押しされて淞滬商埠督辦公署の總辦に就任したこと自体が問題であるとの見方も多い。

しかし、のちに竺可楨は、1936年に事故のため死去した丁の追悼式において、胡適が「淞滬商埠督辦公署の總辦に任じられていたあいだ、在君(丁文江)は一銭(の金)もかすめ取るような事実(汚職など)はない」と報告したことを日記に書き留めている<sup>34)</sup>。竺からも胡適からも信頼されていた当時中央研究院の歴史語言研究所長(のち同研究院総幹事)の傅斯年(孟眞)も、丁文江の一生のうちでもっとも理解されないでいたかあるいは責められたものは、丁の淞滬商埠督辦公署總辦の就任であるという。傅は、丁文江が中国の政治を改良するには機が熟するのを待ってられないとして就任したのであり、自らを“治

世之能臣”に喩えていたことを明らかにし、「在君はBureaucratで、しかも最上のものである。けっしてPoliticianではない」<sup>35)</sup>と断定した。さらに丁文江の死去のほぼ1ヵ月後、胡適は丁を悼んだ文章「丁在君這個人」を著し、なかでも上海時代の丁については、彼は嘘をいうこと、不勉強であること、起債を乱発すること、汚職をすることを、もっとも嫌っていたと証言している。また、胡適は「在君の私生活と彼の政治生活とは一致している。彼の私生活の細心かつ慎重なのは、彼の政治生活の前提でもある」<sup>36)</sup>とみた。したがって、胡適も傅斯年と同様に「丁在君の一生でもっとも人に誤解されたのは民国十五年の政治生活である」と、丁文江の立場を擁護したのである。また、時が流れ「丁氏が上海での職責のいろいろは、だんだんと当時の事実によって、濁りのないものとされねばならない」<sup>37)</sup>との認識もなされてきている。結局、第2次国内革命戦争期への節目の年の1927年1月に、丁文江にとってかわり、租界当局との交渉メンバーの一人であった許沅が淞滬商埠督辦公署の總辦代理を務めることで、丁の上海での行政官としての仕事は終了する。そして、黄郛を市長とする上海特別市が発足するのである。

#### IV 丁文江と竺可楨の学問的交流

##### 1) 丁文江の“科学主義”

胡適は学生時代の竺可楨の生活ぶりをみて、竺がいずれ体をこわし永くは生きられないだろうと心配したように<sup>38)</sup>、丁文江という人物にも細やかな目にむけ、心を開いて接し、丁の人となりを的確に捉えていた。丁文江の死去にあたって、傅斯年は、玄学との論戦で丁を援護し、かつ丁をよく知る胡適が将来丁の

伝記を書くべきであるとも期待していたほどである。そのとき、傅斯年自身も、丁文江の道は近代文明のなかの一筋の“大道”であり、この道には“探求心”をはじめ“理性”や“智慧”，“人類への同情心”があり、道の傍らには“世の中での経験の拡充”のほか，“科学的知識の追求”や“物質の人工的利用”，“不合理性改善の方策”が構築されていたと譬えている<sup>39)</sup>。また、丁が“抹殺主観”の人物であり、学術と社会および国家への奉仕者であると評価していた。

丁文江の“科学主義”の立場は、1923年に集中した張君勳とのいわゆる“玄学と科学”の論戦でも鍛えられた。張の「科学は論理的方法としてコントロールできるのであって、人生観は直観によるため科学によって支配されない」という観点に対して、丁は「科学の万能性、科学の普遍性、科学の一貫性は、その(取り扱う)マテリアルにあるのではなく、その方法にある」<sup>40)</sup>として反論した。

しかし、丁文江には“the conclusionist”すなわち“結論主義者”とのあだ名がつけられていた。このことから胡適は、丁は問題にでくわすといつも自分の“結論”をもち、しかもややもすれば、議論によってもその“結論”をいい加減にすることはしなかったとみた。つまり、胡適は一人の人間が一つの事に対して出す“結論”には、多少なりともいつでも主観の要素を具えているものであり、丁が“抹殺主観”の人物ではなくて、逆に“主観”のたいへん強い人物であると認識していた<sup>41)</sup>のである。一方で、胡適は傅斯年が「在君こそ、新しい時代の最良でもっとも役に立つ中国人の代表である。……このような人格は、当然国民の心のなかに強い印象を与えるだろう」と評価したことに賛同し、「在君は“欧

化”のもっとも進んだ中国人であり、“科学化”のもっとも進んだ中国人である」と結論づけた<sup>42)</sup>。胡適は、丁文江が貴州に旅行してたまたま病気で倒れたとき、当地に“西洋医”がいなかったため、電報をうって貴陽の医者への往診を依頼し、到着するまで薬を飲まなかったことに興味を示している。周囲の人々は“中醫”の診察を受けることを勧めたが、丁文江はもともと“中醫”を信用していなかったため、診察も“中藥”の服用も拒否したのである。また、日頃の生活のうえでは衛生に気を使っており、胡適によれば、丁が外のレストランで食事をするときには、必ずお湯で茶碗や箸を洗い、夏、家で皮をむいた果物を食べるときには、必ず流水に20秒さらしたという。また、丁は海産物が嫌いで、生涯ふかひれ、アワビ、ナマコをたべなかったというエピソードもあり、胡適はよく「それには、どんな科学的根拠があるの？」と丁をからかったと回顧している<sup>43)</sup>。

竺可楨の学風と生活に対しては、かつて浙江大学の自然地理学講座に籍をおいた黄秉維(当時中国地理学会理事長で中国科学院学部委員)が、1990年の竺生誕百年を記念して“正道直行 竭忠尽智”である<sup>44)</sup>と譬えたように、考古学研究者の李濟之(李濟)もまた、丁文江の科学研究に対する態度を“直道而行”と表現している。李濟之は南京の中央研究院時代に、院の評議員として竺可楨ともいっしょに研究生を送ったことがあり、両者を知る人物であった。かつて、李は彼の所属する北平の野外考古調査隊にアメリカのある芸術陳列館のスタッフが加わる話がもちあがり困惑していたところ、最後に、外国生活が長く“欧風”で有名であった“丁大哥(兄さん)”に相談をもちかけたことがある。丁は李に対して

懇切に応え、外国の研究者と接するときの態度についてはくりかえし“straight”だという言葉で表現した。この言葉で李は自分の当初の思いと丁のいう意味とが一致したため、まちがいはないと確信し、しかも丁の学問への姿勢まで窺えたという。つまり、李濟之ももともと“率直な”態度で臨もうと考えていたのである。李は「このことは、私が30年来いつもふりかえってみるものであり、強く感じるところである」と心に刻んでいた<sup>45)</sup>。さらに、李は「在君が私にくれたこの箴言は....彼がすでに東西文化と人生観の基本的区別をはっきり見分けていたことを証明している」とのべ、丁文江が“玄学と科学”論争の結論を予想していたとも思われ、李濟之もまた丁の“the conclusionist”としての性格を把握していたといえる。

## 2) 徐霞客をめぐる丁文江と竺可楨

丁文江が淞滬商埠督辦公署の總辦に就任した1926年5月から12月まで、さらに1928年12月にふたたび北京の地質調査所に戻るまでのほぼ2年半のあいだ、丁の地質学プロパーの成果は、丁の招請によってとして中国の地質学育成のため滞在していたアメリカのコロンビア大学教授グラバウ(A. W. Grabau 葛利普、同調査所古生物学研究室主任および北京大学地質系教授)やT. G. ハレらが編纂した著書に執筆した“Stratigraphical Note”(地層学注釋, 1927)や“The Triassic System—China Proper”(中国本部三疊系, 1928)など解説的な著作に限られている。この時期は、丁文江にとっては淞滬商埠督辦公署の總辦の政治的激務に追われ、また浙閩蘇皖贛聯軍總司令の孫傳芳の命によってその任務に就いたため辞職後もしばらくは“軍閥の走狗”との

批判を浴び、一家の生活も逼迫した“不遇の時代”<sup>46)</sup>でもあった。しかし、1936年翁文灝が丁文江の追悼にあたり贈った詩「追念丁在君」に“..霞客遺蹤追絶域..”と表したように、この間、丁は『小説月報』第17巻(1926)に「徐霞客遊記」をよせたあと、丁文江修編の『徐霞客遊記』や徐が巡り歩いた地域ごとに編年記述した『徐霞客年譜(附地圖)』(ともに1928)など明末の旅行家、地理学家徐霞客に関する研究の成果をたてつづけに発表する。徐の原著『徐霞客遊記』に丁文江の独自の注釈や校訂を加え、徐霞客の人となりだけでなく、徐の行程路線とカルスト地形などの地質上の観察の成果を地図化するなどの研究を行った。侯仁之は、近代地理学の観点から『徐霞客遊記』の科学的内容を明らかにしたのは、まさに丁文江から始まったと指摘し、于希賢も徐学研究は丁によって飛躍的に発展したと断言している<sup>47)</sup>。丁文江は『徐霞客遊記』の序で「私は16で国を出て、26でようやく戻ったので、およそ10年というもの中国の書物を読んだことがなく、はじめ徐霞客という人がいたというのも知らなかった。辛亥(1911)の年にヨーロッパから帰国し、ベトナムから雲南に入り、そこから貴州に入ろうとしていたとき、葉浩吾先輩から“君が地学を勉強しているんだったら、よく歩き回り『徐霞客遊記』をよく読みなさい”といわれた」と吐露している<sup>48)</sup>。もちろん丁文江がいままで中国の古典を読まなかったのではなく、むしろ、5歳にして古詩文を諳んじ、6, 7歳には『綱鑑易知録』や『資治通鑑』などの書物を読んでいたほどである<sup>49)</sup>。1914年から開始された西南の地質調査では、丁文江は「雲南の東と北をひとり200日余り歩き、疲れれば『遊記』を取りだして読んだ」という<sup>50)</sup>。

徐霞客逝去 300 周年記念大会の講演題目  
(1941 年 12 月 20 日 浙江大学史地系主催 於遵義)

演 者	題 目
張其昀	徐霞客の精神
竺可楨	徐霞客の時代
葉良輔	丁文江と徐霞客
方傑人	霞客と西洋宣教師の関係
林文英	江流索隱 <sup>1)</sup>
任美鏢	浙江東部の山水
黄秉維	霞客遊記のなかの植物地理的資料
譚其驥	丁文江のいわゆる徐霞客の地理上における重要な発見について
方樹梅	大錯和尚遺文
萬斯年	明代木土司およびその統治下の麗江考 <sup>2)</sup>
夏定域	貴州における大錯和尚
王維屏	徐霞客の故郷

資料) 竺可楨著, 呂東明・許国華責任編輯『竺可楨日記 I (1936~42)』  
科学出版社, 1984 年. p. 558.

注 1) 任美鏢が代講した。

2) 方傑人が代読した。

丁は“不遇の時代”にあつて、自らの半生を徐霞客と重ねながら振り返り、ひととき地質調査活動から離れ、あたためていた徐霞客という一人の科学者の研究に打ち込んだのである。

一方、竺可楨が「徐霞客之時代」を執筆した 1941 年は、徐霞客逝去 300 年にあたり、遵義の浙江大学の史地系では記念の大会が開催されている。竺の 12 月 20 日付けの日記によれば、大会では表のような講演が行われ、系の同僚や学生のほか、文庫長などの関係者約 80 名余りが集まり盛会だったという。竺が注目したいくつかの講演については短いコメントを記している<sup>51)</sup>。方傑人報告には「間接的な面から、霞客はすでに西洋人の影響を受けて

いたことがわかる」とある。林文英の代理の任美鏢報告には「金沙江はもともとソソコイ川の上流をなしていたが、のち長江に争奪された」とある。竺は譚其驥報告には強い関心をいただいたようで「在君のいう五つの重要な発見とは、もっとも問題のない怒江の支流を除けば、そのほか長江の源を金沙江とするというようなことは、『漢書・地理志』と酈道元の『水經注』にいずれも指摘されているところであり、とくに在君が知らないだけである」と、その評価を受けとめた。じつは、今にいたるまで、丁文江の徐霞客研究に対しては、譚の文献検証にもとづく吟味・評価がもっともきびしいのである。実際にも、丁文江は「徐霞客先生年譜」のなかで「金沙江が揚子江(長

江)の上流であると知ったのは(徐霞客)先生が初めてであり、また(これは)先生の地理上におけるもっとも重要な発見である」<sup>52)</sup>とのべている。ただ、丁はつづけて「惜しむらくは先生を継ぐものがないことである。...康熙の代にくだってカトリックの宣教師が全国の地図を製作したとき、やっと金沙江の出口を再発見し、ヨーロッパ人はただちに“中国人はいまだかつて長江の源を知らないのだ”とのべた。... (これは)わが国の学者の恥でもある」と憤慨し、西洋の中国地理学に対する認識の甘さについては批判をしていたのである。なお、竺の譚其驤に対する期待は高かった。譚は浙江大学在任中に、のちに彼の最後の職場となった復旦大学をはじめ西南聯合大学や国立編譯館などから、より高い給料で招聘する動きがあったが、結局転動しなかった。戦時下にあつて北京にいる家族が移動するのは困難であつたこと、そしてなによりも信頼をえている校長の竺可楨と系の主任張其昀の面子を害すると思つてしたことなど<sup>53)</sup>がその理由として考えられる。竺可楨は大会で発表したメモをもとに、翌々日の12月22日の「夜には《徐霞客之時代》の文を脱稿し、ほぼ1,600字余りとなるだろう」<sup>54)</sup>として原稿を完成し、翌年、大会での報告論文を集めた浙江大学文科研究所発行の雑誌に寄稿した。

竺可楨の「徐霞客之時代」執筆には、逝去300周年にあたりあらためて徐霞客を見直すということに加え、じつはほかの特別な思いが込められている。論文の冒頭には、まずこの論文の結論の一つである“徐霞客と今の時代”がのべられている。清末の潘次耕がつけた『徐霞客遊記』の序の「道が行き詰まっても心配せず、行程を誤っても悔やまず。日が

暮れば樹石のあいだに眠り、飢えると草木の実を食らう。雨風を避けず、虎狼を恐れ憚らない。旅程を計らず、旅の伴侶を求めない。心の赴くまま巡り、体の命ずるまま旅をする。昔からひとりあるのみ」という一節が引用される。竺可楨は西南において徐の旅した道ゆりとその姿を、貴州遵義に移動せざるをえなかつた浙江大学の運命に重ね合わせたのである。竺は、抗日戦争下にあつて、浙江大学が武林(杭州)からまず建徳へ、ついで廬陵、慶遠をへて遵義および湄潭へ“四遷”したこと、しかも遵義を除けばすべて徐霞客が訪れた場所であつたことにひかれた。竺可楨は「浙大が浙江から江西へ、湖南、広西、貴州へとその辿つた道ゆりは、まず霞客とまったく同じである。だから、霞客の遊記は、抗戦のここ4年来の浙大移転の指針としてただならざるものがある。これこそが浙大がとりわけ霞客の逝去300周年を記念する所以であり、さらには一番の意義を有するところである」<sup>55)</sup>とのべている。ただ、丁文江は徐霞客の“单身踏査行”については「私の研究はそれ相当の設備と技術人員の援助がなければ成しえなく、図書館と実験室を離れては、クレッシーやその学生が私の化石を鑑定するのを手伝ってくれることもありえない」として、現代の地質研究の姿との違いを指摘する<sup>56)</sup>。竺可楨もまた、北京、清華および南開の各大学が協力しあつた“西南聯合大学(長沙臨時大学)”のような条件は具えてはいないが、浙江大学が“ひとり”孤立したのではなく、ひるまずに“独自に”移転の道を切り開いたことを評価したのであり、むしろ研究の姿勢と環境については、チームの組織化、図書や実験機器の充実を訴えたのである。1936年4月25日、竺が浙江大学校長に赴任したとき、“校長訓

辞”として学生に放った最初の講話では、従来の中国の大学が図書館と各種の設備を軽視してきたことを批判し、イギリスのカーライルの“よい図書館とは、大学である”との言質を引用し、わずか6万冊で“最高学府”とはいえない浙江大学の蔵書の充実と各系での機器の購入をまず約束した<sup>57)</sup>ほどであった。

竺可楨が「徐霞客之時代」において示した結論のもう一つは、徐霞客は時代の制約を受け、中国古代の旧道徳を身につけていたにもかかわらず、その時代にあつて“知”の精神を求めた希有な探検家であつたということである。竺によれば、徐霞客と同時代の16～17世紀のヨーロッパの探検家は、一人として利益を追求しないものはいなかった。徐霞客のように“知”を求めようとした探検家は、当時おそらくヨーロッパにはいまいという。竺可楨は「霞客先生はまさに明の道義の衰えた末世にあつて、なにゆえにひとり中国とヨーロッパの文化の優れたところを具えることができたのであろうか」と自問したうえで、徐霞客が広く中国を回り、科学の洗礼を受け、西洋人の翻訳された地図や書物を博覧しており、「霞客の“知”を求める精神は偶然ではない」<sup>58)</sup>としたのである。じつは、竺のこの結論は、丁文江の説を拠りどころにしているといえる。すなわち、丁の「(霞客の)このような“求知”の精神はここ100年来の欧米の人々の特徴ではあるが、意外にも先生はすでに280年前に(この資質を)獲得していたのである」という主張をふまえ、導いたものであり、丁文江によれば、徐霞客の“遊(游)”は、ただいたずらに“遊”ではなく「江河之淵源、山脈之經絡」を窮めんとするもの<sup>59)</sup>であつたわけである。

『徐霞客遊記』には広西のカルスト地形の

探査が詳述されており、カルスト化過程や熱帯カルストなどの分野においても科学的価値がある。任美鏗は徐霞客が世界でもっとも早い偉大なカルスト学者であるとみなした。任は『遊記』が青年や科学工作者に対する愛国主義と实事求是の精神の貴重な教材であり、竺可楨によって“求是精神”が自らも在任していた抗日戦争期の浙江大学の校訓として教育の柱に据えられていたこと、また竺の「徐霞客之時代」が自分にとって忘れがたい印象を与えた<sup>60)</sup>ということを回顧している。大会で『遊記』のなかに植物地理のマテリアルを見出した浙江大学講師の黄秉維もまた、竺が“竭忠尽智(知)”を貫き、“觀(見)微知著”の態度で徐霞客研究などの科学史のみならず地理学や気象学などの分野で、いずれもすぐれた貢献をなしたことを讃え、のちに“求是”の精神がさらに中国地理学会の会風にもなったことを指摘した<sup>61)</sup>。

徐霞客逝去300周年大会で任美鏗(林文英の代理)が報告した「金沙江はもとソンコイ川の上流で、のち長江に争奪された」というのは、徐霞客から刺激を受け西南を調査した丁文江の持論でもあつた。1960年9月、竺可楨は西南地方へ出張したおり、雲南の麗江から下関へ移動中にふと金沙江を見たくなり、虎跳峡の手前30kmで車を止めたことがある。その際も竺は丁文江の著述を思い出し、日記には「丁文江はかつて金沙江の本流は石鼓をへて南に向かい、劍川をへて西流し、漾濞江に流入してソンコイ川となり、ベトナムをへて海に入っていたと想定していたことがある。....劍川の標高は2,180m、石鼓の標高は1,880mで、その差は300mである。もし、相対高度が劍川で400m下降していれば、金沙江は劍川から漾濞江に至り、ソンコイ川に

流入していただろう。昨日今日の地勢の観察からでも、この可能性は存在する」<sup>62)</sup>とある。このことから、竺可楨はつねづね丁文江の研究や仮説に興味をもっていた。また、1963年春に昆明に出張したとき、中国科学院植物研究所の呉征鎰や湯佩松らと西南の安寧から約40km離れた温泉で休養しているが、3月20日付けの日記には「私は解放前にここにきたことがある。....この温泉は明代にはすでに名前が出ており....明末、宜山の徐霞客もまたむかし徒歩でここを訪れたと、その遊記に見える」<sup>63)</sup>とあり、おりにふれ、実際の場面で丁文江や徐霞客の論述の内容を思い出していたのである。

### 3) 丁文江の“唯一の”気候変動論－竺可楨説への疑問

丁文江は中央研究院時代に‘*Geografiska Annaler* Vol.14.,1935’へ“Notes on the Records of Droughts and Floods in Shensi and the Supposed Desiccation of Northwest China”)という論文を寄せている。地質学専攻の丁文江にとっては珍しい気候変動に関するほとんど唯一の論文であり、陝西省を中心とした中国西北部での災害や気候乾燥化の仮説を検討したものである。気候変動に関するこの論文は、朱炳海によって1936年に「陝西省水旱災的記録與中國西北部乾旱化的假説」として訳され、『方志』9-2に掲載された<sup>64)</sup>。鉱務を含むきわめて実践的な調査を中心とする地質学専攻の丁文江が、この時期において気候学の論説を残したのは唐突な感があり、また、翌年他界したため、その後どのような研究計画や方向を意図していたのかは明らかではない。しかし、この論文では、丁は14年前に陝西省の干害（旱ばつによる災害）と澇

害（冠水による災害）の資料を用いて、西北の気候乾燥化説の是非について少し検討したことがあるが、データが少なかつたため、あえてすぐには発表することができなかつたのである<sup>65)</sup>とのべている。

丁文江のいう「14年前」とは1921年にあたり、竺可楨が*The Geographical Review*に発表した気候変動に関する画期的論文“Climatic Pulsation during Historic Time in China”(1926)の発表より5年も前になる。竺可楨には、竺がアメリカ留学時に中国のこれからは「以農立国」であると決意したように、平凡ではあるがその一方で科学により“富民強国”を願う偉大な科学者であったとの評価がある。竺の自らの研究領域は、本来、気象学と地理学ではあるが、そのほかの科学の分野にも多大の興味と熱意を示していた。研究分野はきわめて広く、物候に関する文献学的手法や水土保持などの実践的論説も、このような作風から摂取拡大していったと考えられる<sup>66)</sup>。丁文江もまた、地質学、地理学のみならず、動物、古生物学や気候と災害などの分野に関心を示す視野の広い研究者であった。

しかし、丁文江は丁の“気候変動に関するほとんど唯一の論文”のなかで、竺可楨の論文“Climatic Pulsation during Historic Time in China”(1926)に対して、大胆にも批判を投げかけている。丁文江の生前公刊された最後の論文は、同年蔡元培の65歳を祝賀して出版された論文集に収録の“On the Influence of Observational Error in Measuring Stature, Span and Sittingheight upon the Resulting Indices”<sup>67)</sup>である。つまり、丁文江は、気候変動に関する論文を書いてまもない翌年の1936年1月に亡くなっている。『中國分省新圖』も第3版以降は丁の死後、出版

されたものである。したがって、丁はその後気候変動に関する考察を発展させることはできなかったのである。結局、竺可楨も丁文江の批判に対しては応えなかった。

丁文江の論文は、まず、竺可楨が取りあげた資料がきわめて多く、収集した図書は紀元後ほぼ1900年のあいだにわたって、各省の干害および水害の記録はことごとく収集されていることを高く評価する。そして、丁は竺の論旨について、これらの記録に対するさまざまな因子の影響は干害・水害とも同等に及ぶことから、竺は世紀ごとに干害の発生回数に対する水害の発生回数の割合 (droughts to floods ratio) を討論の根拠としていると理解した。丁は竺がこの比率を採用することで、記録に関わるさまざまなその他の分析がむずかしい因子の影響を除外したと考えたのである。しかし、丁文江は竺可楨が試みた方法について、2つの疑問点を投げかけている。第1の点は、丁自らがすでに指摘しているように、竺が干害と水害に対する各因子の影響は必ずしも等しくはないというのを無視していることである<sup>68)</sup>。水害の発生が極端に多いケースは一部の地方に偏っていることなどから、丁は、都会からの遠近によって干害および水害の記録が変わるのは、干・水害に対する重さに比例しているようであるとみた。第2の点は、竺が世紀ごとに全国各地の干害および水害の回数を一つの数として合わせていることである。丁は、これは大きい中国が同一の気候地域に属するようなもので、事実とは合致しないと批判した。たとえば、広東と甘肅が同じ気候区に属していたとしても、広東が水害にあっているときに、甘肅が干害に苦しむことはありえる。丁は、その場合には両者が相殺されて、数字の意義が小さくなるとみ

たのである。そして、第1の点が妥当性を欠くのは、もともとからの記録の貧弱さによるものであり、改善の余地はないとしながらも、第2の点は、省の区分を検討することで、問題を回避することができるとした。丁文江は陝西省の場合について、竺可楨自身の資料を用いて計算したうえで、干害と水害の割合に関する省と中国全体の数字に開きがあり、たとえば「竺氏の論断では、7世紀の全国の気候は乾燥期にあるのに陝西はとりわけ湿潤となり、14世紀の竺氏の認識は(全国の気候は)湿潤であるが、陝西は非常に乾燥している(こととなる)のである」<sup>69)</sup>と具体的にさし示し、それが第2の点の欠陥であると批判したのである。

しかし、丁文江の批判の対象となった竺可楨の“Climatic Pulsation during Historic Time in China” (1926) には、下敷きとなる論文があり、そこではすでに竺自ら、丁が指摘したような資料上の一定の“制限”について論じているのである。すなわち、前年の1925年に『東方雑誌』に掲載された論文「中國歴史上氣候之變遷」には、次の5項目をあげ、澇(水)害や干害の統計の比較には厄介な問題が付随することを明示している<sup>70)</sup>。

(1)災害の程度の相違 “大雨”や“大旱”の内容も史籍によって異なる。(2)地域の大小による相違 広範囲にわたる災害と局地的なものとの違い。(3)各省人口の多寡および交通の利便性の相違 人口が多く交通が便利な地域ほど、いくぶん水・干害の記録つまり書牘(文書)が上奏されることが多い。(4)各王朝による記載の精粗の相違 歴史上、各種の事実はおおむね年代を遡るほど記載が簡略である。したがって、各代の水・干害の数字の相互比較は難しい。(5)水利の興廃の相違 各時代の

水利政策や技術者の有無によって水利・治水の効果が違う。

たとえば、竺可楨は(3)で、丁が強調した「都会からの遠近によって、干害および水害の記録が変わる」という観点と同じことをのべている。首都の所在地では年代が近づくとつれ記録が多くなり、後漢では首都開封のあった河南が、唐では長安の陝西が、南宋では杭州の浙江がそれぞれ記録の突出を示すことを指摘する。また、(2)では“赤地千里”の広範囲にわたる災害と一州一郡あるいは数県の比較的小さな災害を明確に区別している。しかし、竺によれば、もともと澇害（雨災に代表）と干害の統計の比較が難しいというえ、少なくとも(3)、(4)の2点については、各代でのレベルでは澇害および干害はおなじ影響を受けることになる。そこから、丁が批判した「世紀ごとに全国各地の干害および水害の回数を一つの数とし」、また簡便な「省を単位とする」竺の手法が生じたのである。

たしかに、竺可楨の中文および英文の二つの論文は、竺自身による5項目にわたる“資料クリティーク”を前提にしているにもかかわらず、統計の表出方法のなかに弱点が内包されてしまったといえる。さらに、英文の論文では、限られたスペースのなかで中文の論文ではとりあげた“資料クリティーク”の見解をも省略せざるをえなかった<sup>71)</sup>。丁文江が竺可楨の中文の論文「中國歷史上氣候之變遷」を読んでいなかったということはあるが、丁が発表した *Geografiska Annaler* 誌の論文のなかで引用した竺の文献は、英文の論文に限定されていたのである。このことから、丁文江のきびしい批判を受ける一因をつくり出すこととなったと考えられる。

## V 丁文江の死とその影響

### 1) 丁文江の早逝

1936年1月、突然にも丁文江は49歳の若さでこの世を去る。ところで、竺可楨の丁文江との交流については、竺の日記が1936年以前のもの（および1941年の1月上半月分）が欠落しているため、日記のうえでは丁の死への思いや告白と追悼式の取り組みからはじまり、詳細なプライベートな関係についてはうかがえない。しかし、竺の日記からは、大きな穴があいた丁文江のあとをめぐって、中央研究院や地理・地質学界の人々の織りなす綾の経緯を垣間見ることができる。1935年12月7日、丁文江は湘潭潭華山の鉞山調査を終え、疲労と寒さのため窓を閉め切って就寝していたところ、その夜は風雨が強かったので炉の煤煙が室内に逆流、充満して中毒を引き起こした<sup>72)</sup>とされる。湘潭炭鉞の探査は粵漢（広漢）鉄道への石炭供給のための調査活動であった。粵漢（広漢）鐵路工程局は人員を派遣して、丁を衡陽病院へ搬送（その後、長沙の湘雅病院へ転院）したが、脳出血を起こし及ばなかった。竺可楨の1936年1月12日付けの日記には、丁の遺体解剖によれば「心臓および頭部の血管は硬化し、ニワトリの毛細管のようであった。医者は心臓病のために死亡するに至ったと証明している」とある。その日、竺可楨は中央研究院の總辦事處の責任者王毅侯から電話を受け、丁の死を知った。1936年1月5日付けの竺可楨の日記には「在君の死の中央研究院に対する影響は、杏佛（楊銓）よりきびしい。というのも、杏佛は亡くなる前2年のあいだは、ほとんど仕事についていなかったからである」<sup>73)</sup>とあり、研究院総幹事の丁文江の前任者杏佛すなわち楊銓の場合にくらべても、このたびの研究院の混乱

は大きくなるだろうと予想した。翌1月6日の日記には、丁の死によって家族が動揺している様子についてふれたあと、丁文江が鉄道部の委託によって湖南省へ地質調査に赴いていたことを記すとともに、「教育部も（長沙付近で移転用に）清華（大学）のキャンパスの用地の調査物色を依頼していた」ことを明らかにしている。そのため「この二つの仕事は、いずれも在君が行かなくてもよいものである。だから、彼の死と杏佛のとは同じであり、どちらも非業の死をとげたのである。……しかし、在君は（中央研究院の実務に）努力し、進展させた。……つまり、在君の死は杏佛の死とくらべ（研究院との）関係はとりわけ大きいのである」と丁の死を悼んだ。このことは、1月8日に竺の宿舎を訪れた事情に詳しい翁文灝から話を聞き、鉄道部と教育部の委託によって湖南へ赴いていたことを確認している。日記には「咏霓（翁文灝）が宅にやってきて、在君の死はまことに不慮の災難であると話した。……二つの仕事は、どちらもみずからまかり出るに及ばなかったのである」とあらためて、その悔しさを記している。竺はただちに翁に対して、『地理學報』に丁文江の伝記を書くよう依頼した。翁はすぐに原稿をかきあげ、竺もまた翁の文章を英文に翻訳した。竺は翌9日付けの日記に「（翁文灝の文章の）半分は訳せた。ほぼ一千字である。中文の年代の名称にはいろいろと難しいので、あらためて考証せざるをえない。時間はかかるが実りは多い」<sup>74)</sup>と記している。前夜は竺が観測を期待していた月食であったが、彼はそれをろくに見ないほど集中したのである。翁文灝の文章は、のちに「丁文江先生傳」として『地質論評』第6巻に掲載された<sup>75)</sup>。

丁文江の死後、1937年7月29日には北京

（北平）がついで天津も陥落した。清華と北京大学は日本軍の兵舎や傷病兵の病院のほか軍馬の厩として使用され、南開大学は破壊されたため、丁の調査した清華大学のみならず、この地域の各大学や研究機関のほとんどが移転を余儀なくされたのは先にのべたとおりである。

なお、楊銓（杏佛）は1933年6月に上海において、蒋介石の指示を受けた国民党の特務によって暗殺されたとされる。楊は中央研究院の総幹事だけでなく、南京大学の前身で竺の在籍した当時の国立東南大学の中心でもあり、中国民権保障同盟の総幹事を兼ねていた。楊と竺はアメリカ留学組として、親交を深めていた。楊の暗殺を聞いた竺は、思想的に大きな動揺を起こしたが、事件のねらいが民権保障同盟の主要発起人の宋慶齡および蔡元培への威嚇と民主的運動への弾圧にある<sup>76)</sup>と考えた。

中央研究院は上海で会議を開催し、丁文江と楊銓の業績を記念して奨学基金を設け、地質学および社会科学の35歳以下の若手研究者に、それぞれ隔年ごとに2,000元を支給することを決定している。蔡元培院長は奨励賞の議題に次いで、はやくも研究院総幹事であった丁文江の後任の人選問題を提起した<sup>77)</sup>が、これは難航した。

1936年1月18日、中央大学の中央研究院仮大講堂において、丁文江の追悼式が行われた。蔡元培院長が、2年間務めた丁の仕事ぶりを報告したあと、翁文灝が丁の業績についてのべた。翁は竺可楨の求めで執筆した『地質論評』の「丁文江先生傳」でも明らかにしているように、丁の地質学方面での最大の貢献は西南、なかでも雲南・貴州の両省にあり、フィールドでの考察と古生物研究で示した功

績は不滅であると讃えている。また、翁文灝は「追念丁在君」と題する詩を贈った。そこでは、1915年、28歳の丁文江と26歳の翁とともに鶏鳴山炭鉱をゆっくりと回ったことがあったことから記している。その間も、丁は調査活動を忘れず、いっしょに渾河を渡り玉帯山に登って、風化しきった球状の輝緑岩を叩いてみたり、南から北への走向をなす押しつぶせ断層を見分けたりしていた<sup>78)</sup>という。この詩は丁文江への挽歌であるとともに、丁の研究と生活の歴史のダイジェストでもあり、翁自ら詩に添えた文章がその背景をくわしく描写しているのである。

蹤迹追隨廿載前 一朝分袂最凄然  
鷄鳴共涉渾河渡 鷓勢同翻雲水邊

(私—翁文灝—はかつて丁君とともに鷄鳴駅地域の地質を調査・研究し、渾水の大きな流れに難儀しながらも、いっしょに渡ったことがあった。また、房山の水雲洞を回遊し、洞内では体をのけぞりながらの状態で歩いたこともあった)

創造艱難猶昨日 懇懇討論憶當年  
爲師爲友終生約 未老何圖去竟先  
携斧曾經汗漫遊 西南山谷最清幽  
碧鷄金馬雲南路 瀉水藤灘黔外州  
霞客遺蹤追絕域 粵灣車路達江流  
搜羅多少詳圖籍 整理端須仔細求

(在君は、中国人でもっとも早く雲南省の地質鉱産を調査研究したのである。広西、貴州の地質についてもまた、とくに詳細にわたり研究を行った。君は徐霞客に深く感じ入り、霞客の年譜と〔「遊記」の路程〕地図を著している。君は、渝欽〔重慶—広西欽州〕鉄道は広州湾まで路線を改めたほうがよいと考え、

路線を自ら調査した。申報館の60周年記念には、地図が君の主宰によって編纂された)

一代英才一世師 典型留與后人知  
出山潔似在山日 論學誠如論政時

(..君はすぐれた論文を著し、『努力』週刊では張君勳と論戦して科学を高め、玄学を信じなかった。日本の東北侵略開始にあたり、君は『獨立評論』でその政策をくわしく研究し、国権を高揚させ「漫遊散記」も刊行した)

理獨求真存直道 人無餘憾讀遺邇辭  
赤心熱力終身事 此態於今誰得之

(..政治生活での誤解もあったが..上海西報社は愛国者として論評した)

古道魏存直到今 艱危此日已非輕  
救時大計行難得 欺世空言憤不平

(君は欧米をつぶさに見て回り、ソ連を研究し、わが国が現実から出発して徹底的に革新しなければならないと強く感じたのである)

國士無双君已往 知心有幾我何生  
臨終話別衡山側 若谷虛懷語足驚

(君は衡陽での一酸化炭素中毒により終焉を迎えたが、わたしは飛行機でとび、それをしかと見とどけたのである)<sup>79)</sup>

## 2) 丁の後継者育成

丁文江の死去後、中国地質学会は丁の業績を讃え“丁文江先生紀念基金”を創設した。学会が集めた基金の総額は43,765元に達している。賞金の授与は1940年に開始され、1948年の第5回の賞金授与までつづいた。規定によれば「基金の利息所得により、2年ごとに、

中国の国籍をもった地質研究にとくに貢献した者に対して、丁文江先生記念賞金 6,000 元也を支給する」<sup>80)</sup>とあり、第 1 回は湖南のデボン系を中心にした古生物と地層さらに地質構造と貫入岩体との関係について重要な研究をしたとして田奇瑞に支給された。田は当初北京の地質調査所に入所し、とくに地層の実地研究と調査面では、丁文江から大きな影響を受けている。また、同調査所古生物学研究室主任および北京大学教授の A. W. グラバウ(葛利普)からも、腕足類やウミリンゴ、ウミユリなどの化石研究で直接指導を受け、共同して成果をあげている。田は湖南での研究調査フィールドの対応と実績が目され、1927年に湖南省地質調査所の成立と同時に移動し、技師や所長を歴任した。賞金は李四光、黄汲清、尹贊勳につつぎ、1948年の第5回受賞者の楊鐘健まで、いずれも中国の地質研究者を代表する5名に授与されている。ただし、その金額は田奇瑞の4,210元のほか、黄汲清の1万元(1942年)、尹贊勳の40万元(1946)、楊鐘健には国民政府が発行したばかりの“金圓券”による200元(1948)であった<sup>81)</sup>。規定どおり6,000元を支給されたのは李四光(1942)のみであり、戦時下のインフレやそれに対するデノミ実施などの経済的状況の悪化によって賞金の額や内容は変動した。また、丁文江が1931年～1934年のあいだ北京大学教授に任じていたため、“丁文江先生記念基金”の規定によれば、賞金支給後なお原資とする基金の利息に余剰が生じた場合には「北京大学地質系研究處の調査研究に援助する」と明記された。これは丁文江の晩年の研究の場に敬意を表するとともに、基金の分散化に歯止めをかけたものといえる。しかし、“丁文江先生記念基金”の設立は、1940年に地質学

会理事の翁文灝の建議と当時の学会理事長でのちの第4回丁記念賞受賞者となった尹贊勳の努力によって、“学生奨学金”の制度化を促した。中華人民共和国成立後の“丁文江先生記念基金”にもとづく奨励賞の授与は、不幸にもさまざまな事情によって立ち消えとなっている。

地質学会成立の1922年から1945年までに開設された奨励褒章および賞金は、丁文江の生前からの“葛氏獎章(グ氏褒章, グラバウを記念し1925年開設)”, “趙亞曾先生研究補助金(1930)”と死後の“丁文江先生紀年獎金”, “学生奨学金”, “許徳佑先生・陳康先生・馬以思女士紀年獎金(1945)”の5種<sup>82)</sup>にのぼる。丁文江自身も1935年に第4回“葛氏獎章”を受章している。丁が地質調査所の創設者の一人であり、所での最初の成果である「調査正太鐵路附近地質礦務報告書」(1914)が高く評価されたためである。これは梭爾格、王錫寶との共著であり、当初『農商公報』第1巻、第1, 2期(1914)に掲載されたが、図が欠落していた。“丁紀年獎金”受賞者の黄汲清や尹贊勳らは、丁の死後の1947年に“Geological Report of Dr. V. K. Ting”(丁文江先生地質調査報告書, 經濟部中央地質調査所発行)に再録した際、図を挿入している。『丁文江選集』(黄, 藩, 謝編 1993)に収録された「井陘煤田地質圖」(p.19.)および「正太鐵路沿綫一部分地質圖」(p.23.)によると、正太鉄道およびその沿線の井陘炭田の調査は、主として丁が北部、梭爾格(F.ゾルガー)が南部をそれぞれ分担していたことがわかる。なお、ゾルガーは大学での地質学の授業を担当するかたわら、工商部に新設された地質研究所(地質調査所の前身)で研究に従事していた。翁文灝によれば、丁文江はゾルガーの

招請を受け、研究所の主任教官となった<sup>83)</sup>という。このとき、中国地質学会の評議員のフランス人ドゥ・シャルダン (De Chardin, Pierre Teilhard. 徳日進)<sup>84)</sup>が古生物学、構造地質学や岩石学など多方面で貢献したとして、第5回“葛氏奨章”授与も同時に行われている。

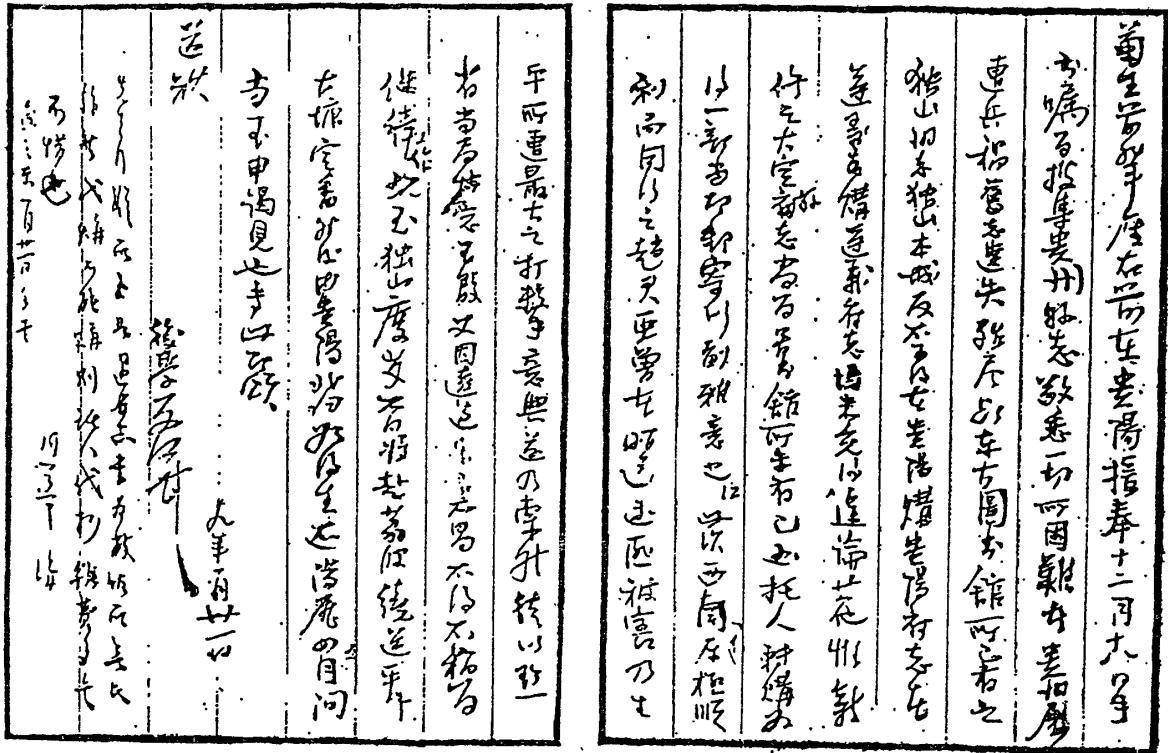
また、“趙亞曾先生研究補助金”は、1929年に地質調査所の趙亞曾が四川および雲南での調査のための移動中、雲南東北部明通近くの開心場で強盗に襲われ、31歳の若さで殉職したのを悼み、翌1930年に開設されたものである。丁文江は当時、地質調査所としては最大規模の地質調査と地質図制作を組織し、大部分に地質調査所のメンバーを充てようとしていた。その一貫として、丁の発議によって趙は黄汲清とともに川広鉄道沿線地質調査隊の隊員に確定したばかりであった。趙亞曾の殉職のおり、丁は別のチームを作り、四川近くの貴州での調査に従事しているところであった。翁文灝は「趙君はじつにもっとも希望のもてる青年地質学者であり....まことに(丁)先生のめがねに叶ったものであった。先生はこの打撃を受け、悲痛極まりなかった。しかし、貴州での調査工作は、依然として止めずにつづけた」と丁文江の嘆きを伝え、「先生のこのときの調査工作が、ことに生涯でもっとも精彩を放つ部分であった」<sup>85)</sup>と理解している。

翁文灝のいう丁の気力に満ちた貴州での調査工作には、たとえば独山県を中心にした省東南部での地層を“豊寧系”と名づけたこと、また、雲南、四川、広西などにフィールドを広げてその存在を確認し、中国での下部石炭系の別称にするほどの成果をあげた<sup>86)</sup>ことなどがある。李四光らはこれらをあとづけ、中

国西南部に広がる一般的な地層として学界で定着化させた。このときの成果は“The Fengninian Series in Kueichow” *Bull. Geol. Soc. China*, (『中国地質学会誌』) 1930, Vol. 9, No. 2., “On the Stratigraphy of the Fengninian System” *Bull. Geol. Soc. China*, 1931. Vol.10, No.2. などに集約される。これらは一連の報告・論文とともに、1947年の黄汲清や尹贊勳らによる“Geological Report of Dr. V. K. Ting”にも再録されている。章鴻釗も「化石の発見と採集工作に至っては、丁文江氏の西南各省に於いて得たる成果が、もっとも卓絶してゐるとされねばならない。ただその工作が最も早かつたといふことのみではなく、現在の西南古生層に對して漸次分別鑑定し得るのは、殆んどすべて丁文江氏が採集したところの化石を以て基礎としてゐる」<sup>87)</sup>とのべ、西南地域の地質研究における丁文江の先駆性について、高く評価した。

次頁の図のような1930年(民国29年)1月31日付けの丁文江の書状<sup>88)</sup>が残っている。ここからは、丁文江が貴州省の独山県や大塘県でのフィールド調査にあたって、『獨山縣志』や『貴陽府志』『遵義府志』『大定縣志』などの文献での検討を行おうとしていたことがわかる。実際には、中央研究院院士や商務印書館理事長となった竺可楨との共通の知人である張元濟(菊生)<sup>89)</sup>や東方図書館などを通じて閲覧しようとしており、戦乱で遺失したのもあって入手に苦勞していた。そして、西南での調査が順調にいったのに、趙亞曾が強盗の被害に遇ったのを聞いて「生涯で受けた最大の打撃である」とのべている。こののち、丁文江は趙亞曾を追悼した輓聯に“輓趙予仁”と題する七言律詩<sup>90)</sup>を4首贈った。

1929年12月、中国地質学会の特別会が北京



丁文江の書状 (1930年1月31日付け)

黄汲清, 潘云唐, 謝廣連編『丁文江選集』(北京大学出版社), 1993年。巻頭

の地質調査所で開かれた。会議の冒頭、司会の翁文灝は趙亞曾の雲南での殉職についてふれ、趙の死を「地質学界における償いのない損失である」と報告している。この会議では、地質調査所の新生代研究室と当時古生物学補助研究員兼フィールド責任者の裴文中が、つい20日ほど前に北京の周口店で「原人の頭骨化石を発見した」という記念すべき発表<sup>91)</sup>もなされている。丁文江を名誉顧問とする新生代研究室は、この発見にもとづく研究の進展をはかるため、ロックフェラー基金の援助を受けて創設されたのである。すでに1927年には、丁は地質研究所および周口店発掘指導のための北京協和医学院との協同研究機構の名誉主任を引き受けていた<sup>92)</sup>。

丁文江は趙亞曾を記念したいと考え、研究補助金の設立の準備に奔走した。第1回受賞

者(1932)は、趙の殉死のおり、チームを組んでいた黄汲清である。なお、研究補助金は、1949年の第18回授与まで毎年欠かさず支給されたが、丁文江記念賞と同様に経済的事情の悪化にともない、当初の各1,200元が2,000元(1943年)、6,000元(1945)、20万元(1947)、“金圓券”80元(1948)と変化していった<sup>93)</sup>。最後となった1949年には、価値の変動を考慮して、引き出すときには預け入れ時と同じ価値の支払いを保障する実物価格を単位とした貯蓄形式の“折實儲蓄単位”として、30分(ぶ)のみが支払われざるをえなかった。

おわりに

1920年代の初め、考古学者の李濟之はアメリカ留学生活のおり、たまたまニューヨーク

自然史博物館の刊行誌のとびらに、一人の中国の地質学者の上半身の写真があったのを見ている。「そのするどい眼光と横に張り出した先の尖った鉤状の口髭は、いずれも私に鮮明な印象を与えた」<sup>94)</sup> という。李濟之のアメリカでの写真による丁文江との邂逅が、帰国後の李と丁の学問的交流の布石であった。李は古生物学、動物学研究者でもあった丁に、多大の影響を受けている。

自然地理学、地形学研究者の黄秉維は、中山大学では W. パンツァーの指導を受け、卒業後はロックフェラー基金の奨学金をえて、北平の地質調査所での研究を開始している。丁文江との関わりは、1935年にまず高級中学の中国地理教科書の編著の仕事を与えられたことから始まった。その後調査所が南京に移動してからは、丁から中国地理の長編を著述へ参画することを進められ、二、三のヒントを与えられている。そのうちの一つは、翁文灝の陸上での境界や李慶遠の海岸・島嶼についての研究成果や資料を活用して発展させ、中国の領域のアウトラインを引くことであり、もう一つは、中国地理の地域区分の方法に関するもので、標高も低くただか 2,000mほどの華南の「南嶺がキーポイントである」という教示であった。竺可楨もまた、のちに物候学的観点から南嶺を中国の熱帯と亜熱帯を分ける重要な境界線とみなす<sup>95)</sup>ことになる。当時の地域区分については、淮河以北は問題があまりなく、南方が比較的複雑で研究者の見解が一致していなかったため、丁は湖南・江西・広東・広西の4省の境界にある南嶺の性格をはっきりさせることが南方の区分問題を解明すると考えていたのである。黄秉維も“科学救国”の意思をもった研究者であり、ただちに南方に赴き、丁からの手紙での指導

も受けながら考察を進めた。1936年1月、黄が丁文江の訃報を耳にしたのは、まさに南嶺での調査活動中のことであった。黄が得た一応の結論は、自然地理学的にみて「いわゆる南嶺とは非常に曲がりくねった分水嶺にすぎない」が、人文地理学的にみて水運を主とする南方にあつて、南嶺の分水嶺は船の航行を阻止し、歴史的にみても、とくに重要な意義をもってきたということであった。

このように、丁文江は独特の“存在感”を放つとともに、若い研究者への確なアドバイスをを行い、中国の近代地理学や関係諸科学を専攻する後継者を育成した。また、丁文江自らも新しい研究分野を開拓した。丁は科学史にも足を踏み入れ、徐霞客のなかに近代的な“知”を求めた精神を見だし、竺可楨も徐の“明代”において“科学性”をもちえたことを評価するとともに、徐の調査行を浙江大学の“四遷”という“今の時代”と重ね合わせて考察した。また、丁文江は“気候変動に関するほとんど唯一の論文”を著し、専門家の竺可楨へ大胆な論争を挑んだにも関わらず、丁の論文の末尾は「この文を脱稿しえたのは、すべてわが友気象研究所長竺可楨先生の鼓舞激励と援助のお蔭であり、竺氏に対してたいへん感謝する」<sup>96)</sup>と結ばれている。“気候変動”の分野において、地質学者の丁文江が気象学者の竺可楨へ、最後とはなったが正面からの射た嚆矢を放てたのも、14年のあいだに丁が構想を熟成できたことと竺が自分に向けられた矢を恐れず丁に教示や資料の提供などを惜しまなかったことによるのである。

竺可楨が浙江大学校長に任じていたとき、日中戦争のため浙江大学も貴州遵義に移転せざるをえなかったし、併任していた中央研究院気象研究所の所長の時代の1934年に、各地

の農事試験場に委託して行った物候観測については、わずか3年の記録を残しただけで、1937年には観測は中止に追い込まれている。竺は研究活動の最盛期を日中戦争の期間に過ぎざるをえなかった。丁文江もまた同様ではあるが、竺とは違い<sup>97)</sup>、ついにそのトンネルをくりぬけられなかったのである。

1948年9月に中央研究院の院士会議が開催されている。竺は「第1回の評議員には丁在君時代に関わり、大学校長(の身分)で選ばれ、第2回は各大学教授グループから選出されたが、(これも)早くも満期となった」<sup>98)</sup>と振り返っている。竺は第3回の評議員にも数理グループから選出され、その秘書となった。竺可楨は丁文江との交流が中央研究院気象研究所での活動のきっかけでもあり、原点であると考えていた。

本稿で考察したように、丁文江と竺可楨の交流は、中国近代地理学とその関係諸科学の成立とその発展に大きく寄与し、また、二人の周辺にはさまざまな研究者の群像が形成されたのである。

#### 注

- 1) 駒井 1998, pp. 1-27.
- 2) 竺 1960, p. 2.
- 3) 当初「調査正太鐵路附近地質礦務報告書」は『農商公報』第1巻, 第1, 2期に, “Tungchwanfu, Yunnan, Copper Mines” は *Far Eastern Review*, Vol.12, No. 6. に掲載された。後者は『丁文江選集』(1993)には謝廣連訳, 黄汲清校で「雲南東川府銅礦」として中文で収録されている。「雲南箇旧附近地質礦務報告」については, 丁文江は活字で見ることはできず, 丁の死の翌年, 尹贊勳によって整理され『地質專報』(乙種, 第10号)に掲載された。この論文も『丁文江選集』に掲載されている。
- 4) 夏, 王著, 地質礦産部書刊編輯室編輯 1982,

p. 6. 学会創立メンバーのうち, 地質調査所関係者が20名を占めた。翁文灝・李四光副会長, 謝家榮書記のほか, グラバウ(葛利普), アンダーソン(J. G. Andersson, 安特生)らの評議員を選出して発足する。

- 5) 翁, 竺, 張 1933, pp. 62-63. “天時, 地利, 人和”はしばしば“天時不如地利, 地利不如人和”として理解され, 社会のなかで“人和”を上位とする上下関係を表しているが, 「中國地理學會發起旨趣書」(原文は趣を越に誤植)においてはもちろん学問分野の明確な違いを示すものとして取り上げられている。しかし, 当時の多くの地理学研究者および地質学研究者は, 地理学と地質学の両分野をもカバーすることができた。
- 6) 同上, pp. 62-63. 竺可楨らは, 清の宣統元年(1909)に張相文によって組織された北京の中国地学会が, 近代的学会創設のうちもっとも早いものの一つであり, 歴史地理については多大の貢献をなしたと評価している。また, 竺らは地学団体が一部の地域に偏在すると考えていたにもかかわらず, 「北京が数百年來の古い都であり, 政治中心はすでに南に移っているといえども, 文化中心は以前どおり傑出していると思われる」として, 北京に地理学会の中心を置くことが既存の学術団体と手を携えて進めるうるものと考えた。しかし, 創立メンバーの活動場所などの事情を考慮し, 結局南京に事務局が置かれた。40名で出発した会員は, 抗日戦争期には200名を超えている。
- 7) 譚, 顧 1934, pp. 1-4. 創刊号には「禹貢的地位」「山海經的新評價」「漢書地理志中掌物産之官」など, 中国の地理書の古典をあらためて見直した論文が掲載されている。表紙見返しに示された禹貢学会編集部の所在地の“北平成府蔣家胡同三號”とは, 燕京大学のそばの顧頡剛の家である。財政不足のため, べつに学会事務所を設けることができなかった。会員は毎月1元, 学生会員は1角を徴収したが, 譚其驥と顧頡剛は毎月20元, ときに40元も投資している。葛 1997, p. 67.
- 8) 譚 1980, pp. 1-2. また, 譚は同号に, 晩年の代表作のひとつ「云夢與云夢澤」を掲載している。なお『復旦學報 社会科学版 1980年増刊 歴史地理專輯』は, 1983年筆者が訪中した際, 上海の華東師範大学で, 譚其驥氏から寄贈された。

- 9) 重慶抗戰叢書編纂委員會編, 程主編 1995, p.44. 国立中央研究院組織法には, 中央研究院の任務として, (1)科学研究に従事する (2)学術研究の指導・連繫の組織化・奨励を行うとあり, 評議会の職権として, (1)研究院の学術研究の方針を決定する (2)国内外の学術研究の共同と相互援助を促進する (3)国民政府の委託を受け, 学術研究に従事する (4)試験院(考試院)の委託を受け, 試験および任用人員の著作あるいは発明事項等に関する審査を行うと設定されていた。
- 10) 駒井 1998, p. 3. 竺可楨は, この時期, 抗戦の不自由な状況下において, 中央研究院気象研究所所長の任にあり, 各地の農事試験場に委託し, その全国的ネットワークを利用した物候観測を開始している。中国気象学会は青島で発足した。
- 11) 重慶抗戰叢書編纂委員會編, 程主編 1995, p.42. そのほか, 多くの政府機関や工場なども移転した。
- 12) 陳, 張, 段, 周, 黃編著 1996, p.119. 李四光は南京にいたすべての人員に行動をとらせた。一部の未鑑定の本や出版物を地下室に残し, 三日三晩を費やして, 書籍や機器, 鑑定済の本などは, 全部廬山に搬送することができたという。
- 13) 許宗文「抗日烽火起 入川辦南開—張伯苓留渝紀事」(重慶抗戰叢書編纂委員會, 楊・李等編 1995) pp.332-334. 当時, 重慶の南開大学キャンパスの掲示板のうえには“国共兩部長 合作擡校長 師生情誼厚 佳話山城揚”との“順口溜(語呂のよい韻文)”が掲げられていたという。
- 14) 楊, 陳 1997, pp.72-75. 蒋介石や孔祥熙, 梁漱溟, 老舍らの官邸および旧居や復旦, 中央大学などの旧跡の復元を行い, 戦時下の“陪都重慶”として政治や経済, 文化面での中国の中心であったことだけでなく, 反ファシズム同盟の極東指導部の中心としての国際都市の性格も具えていたことを, 観光資源のなかに積極的に生かそうとしているのである。
- 15) 長沙臨時大学のほか, 北平, 北京師範大学と北洋工学院を合併した“西安臨時大学(のち西北聯合大学, 西北大学)”も設立された。西南聯合大学北京校友会編 1996, pp.17-18.
- 16) 孫雲鑄, 王烈(以上北大地質), 袁復礼, 馮景蘭, 張席禔(以上清華地質), 張印堂(清華地理), 鮑覺民(南開地理), 李憲之(清華氣象)ら3大学からの教授陣のほか, 米士(Peter Misch, ドイツ籍, 中山地質), 譚錫畴(地質調査所兼任), 王恒升(地質調査所), 鐘道銘, 林超(以上中央地理), 陶紹淵(国立師範学院地理), 張寿常, 洪紱, 趙九章(それぞれ地質, 地理, 氣象, 成立後着任)ら他大学・機関からのメンバーも参加した。なお, 旧南開大学は“系”の構成はなかった。1938年には, 教育部は中等教育の教員養成のために, 湖南藍田に国立師範学院を開校するとともに, 浙江, 中央, 中山, 西北聯合(西安臨時)および西南聯合の各大学に師範学院を付置した。西南聯合大学には史地系も開設され, 基本的には歴史学系および地質地理氣象学系のスタッフが兼任した。同上, pp.257-263., p.405.
- 17) 重慶抗戰叢書編纂委員會編, 程主編 1995, p.215.
- 18) 王 1996, p.46. “諍友”のうち, 胡適が知識分子の代表である。そのほか, 国防設計委員会には, 周鯁生, 錢端升, 楊端六, 肖純綿など10余名が参加した。
- 19) 吳兆洪「我所知道的資源委員會」(全国政協文史資料研究委員會工商經濟組編 1988) p.67. 丁文江が関わった“北票煤礦公司”も資源委員会に所属した企業単位である。なお, 毛澤東は「論十大關係」(1956)のなかで, 共産党と民主諸党派や知識分子との共同を訴えたが「衛立煌や翁文灝のような愛国心のある国民党の軍人や役人のように, われわれはひきつづき彼ら(民主諸党派や知識分子)の積極性をひきださねばならない」として, 翁文灝らを評価した。衛立煌は国民党の戦区司令官で, 中華人民共和国成立後は人民政治協商会議の常務委員を務めた。毛 1977, p.279.
- 20) 重慶抗戰叢書編纂委員會編, 程主編 1995, p.69. 当時, 蒋介石も大会に祝賀の手紙を寄せ「いかにひたすら心を打ち込んで発明創造をし, 戦時の急需に応えるか, いかに科学の水準を高め, わが国文化の国際的な榮譽を樹立するか」などと期待をしていた。
- 21) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.742. 竺可楨の1944年3月9日付け日記。翌10日付け日記には, 丁文江記念賞は「貴州三疊紀地層」を著した許徳佑に授与され, 郭曉嵐の「大氣中長波輻射」は修士論文でありかつ理論に偏重しているとして“名譽賞”とされたとある。
- 22) 駒井 1982, p.302. このアトラスはそれまで

- に作成された 7~8,000 枚の地図や経緯度測定数値など 1,000 余の資料を使用し、3 年がかりで完成している。
- 23) 黄, 藩, 謝編 1993, p.14.
- 24) 表紙見返しには、赤青眼鏡(付録)によって立体視できる垂直縮尺比が平面比の 15 倍にあたる中国全土の「立体模型圖」を掲載している。丁, 翁, 曾編纂 1934, p.3. なお『中國分省新圖』と称したが、省別地図を意図して作成されたものではなかった。
- 25) 丁, 翁, 曾編纂 1939, p.6. 曾世英は『中國分省新圖』の「四版自序」において、国情が悪化し、財力も乏しくなっている状況にあつて、「中國地形圖編纂會」が人員を派遣し、原図の作成や印刷工程で工場に滞在して指導するなど、會の援助なしには第 4 版は完成しなかったとのべる。
- 26) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.314. 3月1日付けの日記。竺可楨は第 3 回全国教育會議に出席するために重慶に向かった。ここで竺の利用した地図が丁文江の作成した地図であるにしても、携帯可能の『中國分省新圖』であったかどうかは断定できない。
- 27) とくに 1935 年に第 3 版を出版する際には、初版での地名表示数約 6,000 から 10,000 余に増やし、図幅に関しては、1939 年発行の第 4 版では初版のうちの半数近くが改変されている。
- 28) この主張は“鄉村建設”から着手して農村の購買力を高め、そこから工業を農村に復興させるという梁漱溟らの運動ときびしく対峙した。駒井 1999-a, p.10., p.21.
- 29) 丁文江は将来政治生活を送るにあたって“好人”である資格の保存のほか、職業人でありかつその道での能力を高めることなど 4 つの条件をあげていた。胡 1998, p.280.
- 30) 駒井 1999-b, pp.255-257.
- 31) 当初、丁文江によって江蘇省公署管轄の市郷を淞滬商埠督辦公署の所轄地域としたのは、閘北、南市、蒲淞、洋涇、高行、陸行、塘橋、楊思、三林、陳行、引翔、法華、涇涇、顧橋、北橋、馬橋、塘湾、閔行および宝山県の呉淞、江湾、高橋、殷行、彭浦、真如の 24 にのぼる。朱沛蓮「丁文江黄郛與大上海」(『中外雜誌』23-4 1978 原出, 雷編 1997) p.138.
- 32) 鄭錫煌「丁文江」(譚主編, 王・趙副主編 1993) p.458., 朱(雷編 1997) pp.140-142. とくに『字林西報』は公共租界内の合同審判公堂を回収したことをあげ、“国の心”を具現したと評価している。
- 33) 殿木 1942, p.118. 殿木によれば、淞滬商埠督辦公署は上海特別市が組織される以前に租界の外部に設けられた“市政府類似”の機関であり、市政府の出現をもたらす中国の新しい状況は「さらでだに複雑な上海の政治情勢を更に複雑ならしめた」とみる。
- 34) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.9. 在君は丁文江の字である。
- 35) 傅斯年「丁文江一个人物的几片光影」(『獨立評論』189 期 1936 原出, 雷編 1997) p.29. 傅斯年は、丁文江がもし Politician としての生涯を送ったなら、さんざんな目にあつたらうという。胡適は、傅のこの文に丁の淞滬商埠督辦公署總辦時代の功績がのべられており、もっとも公平に論じられていると断言する。胡適「丁在君這個人」(『獨立評論』188 期 1936 原出, 朱編 1998) p.282.
- 36) 胡(朱編 1998) pp.279-282. 胡適は、丁文江が淞滬商埠督辦公署總辦の職を引き受けたとき、たまたま丁と上海の客利飯店に泊まりあわせていたが、丁は毎日多くの推薦状を書くなど実務的な仕事も一所懸命にしているのをみている。
- 37) 朱(雷編 1997) p.145.
- 38) 駒井 1998, p.2. 胡適は、竺可楨が 16 歳のころ経済的事情から食費をきりつめた勉学生活を送っていたのを「二十歳までもつまい」と心配し、友人にも語っていた。
- 39) 傅斯年「我所認識的丁文江先生」(『獨立評論』189 期 1936 原出, 雷編 1997) p.19. 傅は丁文江の社会的観念が完全に“奉仕”という信念のもとに支配されていたとのべている。丁の死去のあと、傅は丁への追悼文を「我所認識的丁文江先生」として一晩で書き上げたが、感情が昂り、1/3 しか書けなかったという。そのため、傅は書き残したあれこれを「丁文江一个人物的几片光影」として、『獨立評論』の次号第 189 期に寄せた。傅(雷編 1997) p.23. 注 35) を参照せよ。
- 40) 張君勳「人生觀」(『清華周刊』1923 原出, 《現代中国思想論著選粹》編輯委員会編 張, 丁等著

- 1997) pp.33-40, 丁文江「玄学與科学」(『努力周報』1923原出, 同) pp.41-60. 玄学とは一般に Metaphysics 形而上学をいう。しかし, 丁文江は「張君勸は筆者の友人であるが, 玄学は科学の仇敵である。玄学の亡者が張君勸の体に憑いている」(同 p.41.)ときめつけ, 張の玄学を“非科学的な観念論”として批判した。
- 41) 胡(朱編 1998) pp.277-268. 胡適によれば“the conclusionist”とのあだ名をつけたのは王文伯である。
- 42) 傅「我所認識的丁文江先生」(雷編 1997)p.13. 傅斯年是, 丁文江にはまた一般に無趣味のユーモアのない人物すなわち英語でいう“matter-of-fact”, “dry-as-dust”の人物であったとの評価があるが, 丁はもともと親しい人々とのあいだでは, 議論や放談もとりかわす人であったとして, 人々の誤解を指摘している。傅「丁文江一个人物的几片光影」(雷編 1997) p.13. 胡適は, 丁文江がこのような性格を身につけたのも, 丁が15歳で渡欧し, イギリス人の生活習慣の影響をうけたものだとする。胡(朱編 1998) p.277.
- 43) 胡適によれば, 丁文江は奢侈をたいへん嫌い, 睡眠は必ず8時間とり, 酒は飲まずに箸を洗うのに用いたほどであった。胡(朱編 1998) p.278.
- 44) 駒井 1998, p. 8. 黄秉維は『竺可楨日記』の序文にも, 竺可楨の学風と生活は実直で, 清く気高かったとしている。浙江大学の同僚として, 竺から大きな影響を受けた譚其驥も「求是は求真を手本とする。……學術の趨勢は変化するものであるが, 求是の精神は不変のものである」とし, 竺と同様, 求是の精神をモットーとしていた。
- 45) 李濟「對於丁文江所提倡的科学研究几段回憶」(『中央研究院院刊』第3輯原出, 雷編 1997) p.110. 李濟之(李濟)はアメリカで5年間の学生生活を送ったが, じつは外国人といっしょに仕事をしたことがないということから, 丁文江に相談をもちかけたのである。
- 46) 翁文灝によれば, 丁文江は滬商埠督辦公署總辦の辭職後しばらくは, 友人からの援助をうけ生計を維持していたという。翁「丁文江先生傳」(『地質論評』第6卷原出, 黄, 藩, 謝編 1993) p.244. 丁の追悼式において, 胡適が滬商埠督辦公署の總辦時代の丁は少しの金もかすめ取るようなこと(汚職など)はしていないと報告したことは事実のようである。
- 47) 侯 1982, p.236. 侯によれば, 丁文江は徐霞客から岩石の性質や地質構造, 流水の浸食などの科学的描写を見いだしているという。于 1989, p.249.
- 48) 陳 1986, p.66.
- 49) 謝覺民「徐霞客與丁文江」(南京師範大学地理系主編 1986) p.162. 謝はアメリカのピッツバーグ大学地理系の教授で, 浙江大学の名誉(顧問)教授でもある。同南京師範大学地理系主編 1986には「徐霞客—現代地理学の先駆者」(原文は英文, 1958)も収録されている。
- 50) 陳 1986, p.66.
- 51) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.558. 竺可楨の1941年12月20日付けの日記。張其昀や遵義カトリック教会の神父であった方傑人など一部をのぞき, 演者のほとんどは, 中華人民共和国成立後も地理学会の指導的メンバーとなった。文革の初期には, 大字報に「地理研究所には(竺の勤務した)浙江大学の卒業生が多く, 四世同堂の説がある」などとの誤解にもとづく竺への攻撃がみられたほど, 竺可楨の教え子や地理学の同僚に対する面倒見と竺への信頼は厚かったといえる。駒井 1998, p. 4. 上記のように, 実際にも将来にわたり活躍した研究者に浙江大学関係者は多い。方傑人ものに浙江大学の歴史学の教授となっている。
- 52) 丁 1975, 附録 p.56.
- 53) 葛 1997, p.131. 1985年, 譚其驥はアメリカに滞在していた葛に送った9月27日付けの手紙に「十日ほど前, 香港から来た謝正君(牟潤の孫弟子)に会い, 最近, 張其昀が台湾で病死したことを知った。張は政治上は頑迷のまま, 蒋介石を擁護していた。しかし, 浙大の十年間は私を手厚くもてなしてくれた。(張は台湾に移り)にわかにかに永く隔たることとなったが, (いまや)人の心を打ち, もの悲しさを免れがたい」と記し, 終始国民党の側に立ち, 蒋介石を支持した張其昀との微妙な関係を吐露している。
- 54) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.559. 竺可楨の1941年12月22日付けの日記。実際の「徐霞客之時代」の完成稿は1,900字余りとなり, 『国立浙江大学文科研究所史地学部叢刊』第4号に掲載された。竺著, 中国科学院地理研究所・張志遠・

- 龔高法編輯整理 1981, 37-40. として再録。なお、この論集は1948年に『地理学家徐霞客』として商務印書館から刊行されている。
- 55) 竺可楨「徐霞客之時代」(『国立浙江大学文科研究所史地学部叢刊』第4号 1942原出, 竺著, 中国科学院地理研究所・張丕遠・龔高法編輯整理 1981) p.37.
- 56) 謝(南京師範大学地理系主編 1986) p.164. 当時, 丁文江は地質調査所において, G. B. クレッシーとも交流があり, 調査研究だけでなく, 彼の学生とともに化石の保存や整理など実務的な面でも援助をえていた。
- 57) 竺可楨「大学教育之主要方針」(『国立浙江大学校刊』第248期 1936原出, 竺著, 沈編 1998) pp.93-95. 竺は彼の留学したハーバード大学の図書館の蔵書が370万冊で, しかも1935年の1年だけで5万冊増えたとし, ヘルリン大学で200万冊あると指摘する。中国ではたかだか清華大学で28万冊, 中山, 燕京でそれぞれ27万, 北京23万, 中央, 金陵, 嶺南, 南開で15万以上であり, 5万以上の蔵書のあるものは数少ないと嘆いている。
- 58) 竺「徐霞客之時代」(竺著, 中国科学院地理研究所・張丕遠・龔高法編輯整理 1981) p.39. 竺可楨は, 当時のヨーロッパの探検家のうち, 下のは海賊と同じであり, 上のものもまた, 人の所有するものを奪い取り, 自分のものにしようと思わないものはない。その土地の人民の宗主権を自国の君主に帰属させるのが, 今日のいわゆる帝国主義なのであるとのべる。
- 59) 丁 1975, 附録 p.25. 丁文江は徐霞客51歳の崇禎9年丙子(1636)の年譜で展開している。
- 60) 任 1984, p.252, pp.256-257. なお, 任美鏗の「徐霞客對世界岩溶学的貢獻」は, 竺可楨の逝去10周年を記念して執筆された。徐霞客はカルストの溶食作用や熱帯カルストの典型である“峰林”などについてくわしく報告している。
- 61) 駒井 1998, p.8.
- 62) 竺著, 鄭・孫責任編輯 1989, p.495. 1960年9月28日付けの日記。つづけて「石鼓での金沙江は, 一つの河谷から南流することができるので, 白漢場から劍川へは傾斜もまた北から南に向かっており, その差も標高にして400mの差にすぎない」とある。
- 63) 竺著, 鄭・孫責任編輯 1989, p.721. 竺可楨は省政府の張衡とその家族たちといっしょに訪れたことがある。日記には, さらに今年もモモやカイドウ(枝垂れの), ハクモクレンなどが同時に咲いていることなどを書き留めており, 物候的興味も示している。駒井 1998, p.12, p.24.
- 64) 丁文江「陝西省水旱災的記錄與中国西北部干旱化的假說」(1935) 黄, 藩, 謝編『丁文江選集』1993, pp.189-195. として再録されている。
- 65) 同上, p.190.
- 66) 駒井 1998, p.7.
- 67) 黄, 藩, 謝編 1993 掲載の「丁文江學術著作系年目錄」による。p.240.
- 68) 竺可楨もまた, Co-Ching Chu 1926. では「干害および澇害は, 同じ密度では記録されていない。地域的な広さの違いによってもその影響には差異がある」との基本的認識は前提としている。p.278. 「中國歷史上氣候之變遷」では, すでに下の注71)のように澇害や干害の統計の比較の際に生じる“厄介な5項目の問題”を考慮しているのである。
- 69) 丁 1935, (黄, 藩, 謝編『丁文江選集』1993.) p.190.
- 70) 竺著, 《竺可楨文集》編輯小組編 1979, pp.58-59. 『東方雜誌』1925年. 第22卷, 第3期に原載。
- 71) Co-Ching Chu 1926. ここでは, 竺はたしかに“厄介な5項目の問題”の指摘をほとんど省略している。しかし, 中文の論文「中國歷史上氣候之變遷」に取りあげられている『圖書集成』や『東華錄』の雨災と水災との区別の曖昧さなどの“資料クリティーク”も, クリア済を前提にそれぞれ明, 清代の資料の Tu Shu Tsi Cheng (Chinese Encyclopedia), Tung Wah Loh として活用しているのである。
- 72) 朱經農「最后一个月の丁在君先生」(『獨立評論』第188期原出, 雷編 1997) p.156.
- 73) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.5.
- 74) 同上, p.6. 竺は翌々日に上海で開かれる蔡元培の70歳の祝賀会に出席しなければならないこともあり, 仕事を急いだ。
- 75) 黄, 藩, 謝編 1993. の巻末にも再録されている。竺は10日に仕上げ, 言語学者でアメリカ留学時の親友でもある趙元任に, 翻訳の閲読を依頼

している。

- 76) 《竺可楨傳》編輯組編 1990, pp.49-50. この時期、竺可楨はあまり政治には関わらず、気象研究所所長として気象学の研究と観測施設とネットワークの完成に専念していた。楊の暗殺のおりは用務で海外出張中であつたが、のちにこの事件を知ったとき、国民党特務の政治的意図におおいに悲憤したという。
- 77) 竺著、呂・許責任編輯 1984, pp. 8-9. 1月11日に、ちょうど中央研究院の蔡元培院長の70歳の祝賀会があつたため、会議は同じく上海で開かれた。竺可楨の1月12日付け日記には「もくろみには翁詠霓(翁文灝)、任叔永(任鴻雋)、胡適之(胡適)、朱騷先、李潤章らがいる。私は詠霓を主張したが、孟真(傅斯年)、滌三、寬甫(徐韋曼)の諸氏はいずれも反対した。その気性がたいへん良くなく、協力しにくいというのである。蔡先生はまた、それには蔣先生(蔣介石)の側近の人物をという」とあり、会議はとりわけて混乱した。
- 78) 翁文灝は、丁文江には人材を指導する優れた力があり、また丁自身の(地質学などの学問的)興味によって人を魅了することができたと回顧している。ここでも丁のいきいきとした調査活動が、翁には魅力的であつたのである。翁文灝「對于丁在君先生的追憶」(『獨立評論』188期原出、雷編 1997) p.45.
- 79) 翁「追念丁在君」(楊永慶整理「翁文灝紀事詩選」中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯部編 1994) p.269. 編者の楊永慶は「翁文灝紀事詩選」に集めた翁文灝の詩の多くは「史実にもとづいた叙事詩であり、近代史研究の一部でも補えればと願う」と編集の意図をのべている。なお、水雲洞はいつぱんに“雲水洞”といい、長江以北における中国最大のカルスト洞穴である。同年5月、この丁文江の殉死の場であつた長沙において、あらためて追悼の催しが行われたとき、翁はまた「長沙丁在君葬事」と題する次の詩を贈っている。同上, p.270.
- 涕下愴然一夢中 更兼苦雨又凄風  
江城遠映長天外 朝露堪憐大數終  
我友已亡心太苦 君才未盡記難工  
瀟湘西側螺絲眼 白石紅泥埋此躬
- 80) 夏・王著、地質礦産部書刊編輯室編輯 1982, p.38.
- 81) 同上, 1982, pp.36-40. 田奇瑤は、中華人民共和国成立後は中南重工業部の地質調査所をへて、中央の地質部中南地質局副局長や地礦司副司長などを歴任し、文革中の1975年に死去した。なお、1948年に国民政府が発行した“金圓券”紙幣は、1圓がこれまでの法幣300萬元、4圓で1米ドルに相当した。
- 82) 同上, pp.32-43. “葛氏獎章”は、丁文江がアメリカの地質調査所のD. Whiteを通じて招請したA. W. Grabau(葛利普)が、中国の近代地質学の成育に大きく貢献したことを記念してつくられ、1948年までに9回授与された。“趙亞曾先生研究補助金”は若手研究者計22人に、“學生獎学金”は1941年から1948年までに5回、31名に支給されている。“許德佑先生・陳康先生・馬以思女士紀年獎金”は、中央地質調査所の技師で古生物研究室無脊椎古生物班主任兼任の許德佑と陳康技手補および馬以思練習員の3人が、貴州西部で調査移動中強盗に襲われ、趙亞曾と同様、それぞれ36, 28, 25歳の若さで殉職したことを悼み設けられた。1945~1949年の間、第3回を除いて“許德佑先生紀年獎金”などと各人の名を冠した賞が計15名に授与されている。
- 83) 黄, 藩, 謝編 1993, p.242.
- 84) 夏・王著、地質礦産部書刊編輯室編輯 1982, p.35. ドゥ・シャルダン(Pierre Teilhard de Chardin)は徳日進であり、地質学の研究を進めながら、フランスのカトリック神父として対華工作を行っていた。地質調査所の顧問でもあり、中国地質学会評議員を2期(1928~1929)務めた。
- 85) 黄, 藩, 謝編 1993, p.244. この時期は丁文江が“不遇の時代”を通り過ぎたばかりのころであつた。
- 86) 丁文江は“豊寧系”の地層を大きく下部の岩関層群と上部の大塘層群とに2分し、さらに前者については独山南部の代表的地方名をつけ革老河統・湯把溝統に、後者については大塘の地名をつけた旧司統と独山の地名をつけた上司統とに細分した。丁 1931(黄, 藩, 謝編 1993.) pp.153-154. また、貴州の地層について、カンブリア系から三疊系までのものを整理した。丁 1930(黄, 藩, 謝編 1993.) pp.145-146.

- 87) 章 1943, pp.102-103.
- 88) 黄, 藩, 謝編 1993. の巻頭の「丁文江先生遺像」に次いで収録されている。
- 89) 1966年5月12日付け竺可楨日記には「張元濟についていうと, 商務(印書館)に大きな功績がある」と記している。竺著, 高・蘇責任編輯 1990, p.63. また, 張は浙江海塩出身者であった。1948年9月23日に中央研究院の第1回院士会議が開かれ, 張元濟は代表として挨拶をしているが, 竺はその日の日記に, 82歳の張が84歳の呉稚暉に次ぐ長老であり, 院士81人中18人が浙江出身者が占めると記している。竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.1,176. 1973年9月の全人代の中国科学院選出代表についても, 浙江出身者が15名中6名(40%)を占めるとして, ずっと自己の出身地域へのこだわりを示していた。駒井 1998, p.12. 1939年5月に日本軍が重慶を空爆したとき, 現地の商務印書館が破壊されたが, 冬には回復し営業を再開している。しかし, 上海や香港の印書館はほとんどの資産が損失した。唐慎翔「王雲五重慶復興商務印書館」(重慶抗戰叢書編纂委員会・楊・李等編 1995) pp.280-281.
- 90) それには“三十書成已等身, 趙生才調更無倫; 如何燕市千金骨, 化作天南萬里塵”, “老驥識途空自許, 孤鴻墮網竟誰還... 遙想開心場上路, 春來花帶血痕殷”などとある。夏・王著, 地質産産部書刊編輯室編輯 1982, p.37. 予仁は趙亞曾の字である。
- 91) 夏・王著, 地質産産部書刊編輯室編輯 1982, pp.68-70. 会議は趙亞曾の追悼と“原人”に関する報告に話が集中した。前回の1927年の特別会では「その影響はまさに全世界に及ぼんとし... 人類の起源という重大な問題の解決に一步近づいた」(中国地質学会副会長グラバウの言)とする古人類の歯の発見と歩達生による“中国原人北京種 *Sinanthropus Pekinensis*”との命名が発表されている。丁文江は研究室創設に力を割き, 歩が新主任となった。また, 調査所顧問で北京協和医学院でも研究を進めていたドウ・シャルダンも古生物学研究員を兼任した。
- 92) 賈・黄著, 北京外文出版社・日本経済新聞出版社共同編集 1984, pp.52-56.
- 93) 夏・王著, 地質産産部書刊編輯室編輯 1982, p.37. 「紀年趙亞曾先生研究補助金獲得者表」にもとづく。第1回丁記念賞受賞者の田奇瑛も第3回研究補助金を受けているが, 同時に徐光熙が受賞したため1,200元を折半し, それぞれ600元ずつ支給された。
- 94) 李 1997, p.108.
- 95) 黄著, 《黄秉維文集》編輯小組編 1933, p.viii-ix. 南嶺での工作については, 黄はほぼ3ヵ月間, 江西, 湖南, 広東, 広西の省境をなんども越え, 地形や土壌, 植物, 気候などの自然地理的調査を進めている。また, 1935年の中国地理の著述へ参画の成果は, 地質調査所と地質研究所編撰の『中国地理(長編)』および『高中中国地理』に現れた。鄭度, 楊勤業, 顧鐘熊「黄秉維與中国地理学」(黄著, 《黄秉維文集》編輯小組編) 1933, p.491. 黄はこれらの調査の積み重ねの結果, 南嶺を中国における熱帯の北の境界と考えた。竺可楨は物候の南北的差異を観察し, 南嶺を熱帯と亜熱帯を分ける重要な境界線であると結論づけた。竺, 宛 1980. また, 丘宝劍によれば, 張宝堃や侯学煜ら多くの研究者が南嶺を中国の熱帯または熱帯北部(北熱帯)の北限とみなしていると指摘する。丘 1993, p.300.
- 96) 黄, 藩, 謝編 1993, p.194.
- 97) 竺可楨もまた最晩年は文革の混乱のなかにあり, その結末を見ることはできなかった。駒井 1998, p.3.
- 98) 竺著, 呂・許責任編輯 1984, p.1,177. 1948年9月24日付けの竺可楨の日記。選出された評議員の名前の大半を書き留めている。数理グループから選出の中央研究院第3回評議員には翁文灝も含まれる。社会科学グループには, 胡適, 傅斯年, 李濟之などの名が挙げられている。胡適についてのみ46票(母数は不明)という数字があり, 馬寅初は当選したが, 手紙で辞退したことを特記している。

## 参考文献

- 1) 駒井正一「竺可楨の物候思想の源流とその背景—主として, 日記および書簡からみる—」『金沢大学文学部論集』史学・考古学・地理学篇, 第18号, 1998. 1-27.
- 2) 竺可楨「1960年全国地理学術会議總結」『地理学報』1960-2, 1-8.

- 3) 黄汲清, 藩云唐, 謝廣連編『丁文江選集』北京大學出版社, 1993年. 247p.
- 4) 夏湘蓉, 王根元著, 地質礦產部書刊編輯室編輯『中國地質學會史』地質出版社, 1982年. 254p.
- 5) 翁文灝, 竺可楨, 張其昀「中國地理學會發起旨趣書」『方志月刊』第6卷, 第4期, 1933. 62-63.
- 6) 譚其驥, 顧頌剛「發刊詞」『禹貢』半月刊, 1934-3, 1-5.
- 7) 葛劍雄『《往事與沈思》傳記叢書 悠悠長水 譚其驥前傳』華東師範大學出版社, 1997年. 368p.
- 8) 譚其驥「前言」『復旦學報 社會科學版 1980年增刊 歷史地理專輯』1980. 1-2.
- 9) 重慶抗戰叢書編纂委員會, 程雨辰主編『重慶抗戰叢書 抗戰時期重慶的科學技術』重慶出版社, 1995年. 284p.
- 10) 陳群, 張祥光, 段萬倜, 周國鈞, 黃孝葵編著『李四光傳』人民出版社, 1996年. 397p.
- 11) 重慶抗戰叢書編纂委員會, 楊耀健, 李宗杰等編『重慶抗戰叢書 陪都人物紀事』重慶出版社, 1995年. 364p.
- 12) 楊曉霞, 陳國生「重慶陪都文化資源與旅遊開發」『經濟地理』1997-9, 72-75
- 13) 西南聯合大學北京校友會編『國立西南聯合大學校史-1937至1946年的北大, 清華, 南開』北京大學出版社, 1996年. 678p.
- 14) 王金鏞『抗戰時期的中國知識分子』中國社會出版社, 1996年. 291p.
- 15) 全國政協文史資料研究委員會工商經濟組編『回憶國民黨資源委員會』中國文史出版社, 1988年. 323p.
- 16) 毛澤東『毛澤東選集 第五卷』人民出版社, 1977年. 500p.
- 17) 竺可楨著, 呂東明·許國華責任編輯『竺可楨日記 I (1936~42) ~II (1943~49)』人民出版社, 1984年. 1, 372p., 竺可楨著, 蘇宗偉·高庄責任編輯『同 III (1950~56)』科學出版社, 1989年. 742p., 竺可楨著, 鄭秀靈·孫啓榮責任編輯『同 IV (1957~65)』科學出版社, 1989年. 994p., 竺可楨著, 高庄·蘇宗偉責任編輯『同 V (1966~74)』科學出版社, 1990年. 779p.
- 18) 駒井正一「近代中國地理學的總合性と“總合體”概念」『地理の思想』(京都大學文學部地理學教室編) 地人書房, 1982年. 320p.
- 19) 丁文江, 翁文灝, 曾世英編纂『中國分省新圖 申報六十週年紀念』總發行處 上海申報館, 1933年. 116p. (圖1-50幅, 地名索引および檢字表1-66), 同 第2版, 1934年. 116p., 同 第3版, 1936年. 125p., 同 第4版, 1939年. 136p., 丁文江, 翁文灝, 曾世英編纂, 曾世英, 方俊增訂『中國分省新圖』戰后訂正第5版, 1948年. 152p.
- 20) 駒井正一「梁漱溟の“鄉村建設”思想をめぐって」(1999-a)『金沢大學文學部論集』史學·考古學·地理學篇 第19号, 1999年. 1-25.
- 21) 駒井正一「中國大都市の市区-郊区制にみる城鄉システム」(1999-b)『大都市圈研究(下)-多様なアプローチ』(成田孝三編)大明堂, 1999年. 336p.
- 22) 雷啓立編『印象書系第三輯 丁文江印象』學林出版社, 1997年. 274p.
- 23) 譚其驥主編, 王文楚, 趙永復副主編『中國歷代地理學家評傳 第三卷(清, 近現代)』山東教育出版社, 1993年. 567p.
- 24) 殿木圭一『上海』岩波書店, 1942年. 187p.
- 25) 朱文華編『自由之師-名人筆下的胡適 胡適筆下的名人』東方出版中心(原中國大百科全書出版社, 知識出版社〈滬〉)1998年. 356p.
- 26) 《現代中國思想論著選粹》編輯委員會編, 張君勳, 丁文江等著『科學與人生觀』山東人民出版社, 1997年. 429p.
- 27) 侯仁之「紀念作為時代先驅的地理學家徐霞客」『地理學報』1982-9, 236-240.
- 28) 于希賢「對近代先驅地理學家徐霞客研究的回顧與展望」『地理學報』1989-6, 246-252.
- 29) 陳江「丁文江與徐霞客-論丁文江在研究徐霞客中的貢獻」『地理研究』1986-3, 65-70.
- 30) 南京師範大學地理系主編『徐霞客研究文集-紀念徐霞客誕辰四百週年』江蘇教育出版社, 1986年. 305p.
- 31) 丁文江「附錄丁文江所撰徐霞客年譜」(1928)『徐霞客遊記』商務印書館, 1975年. 1-63(附錄).
- 32) 竺可楨著, 中國科學院地理研究所·張丕遠·龔高法編輯整理『竺可楨科學創作選集』科學普及出版社, 1981年. 210p.
- 33) 竺可楨著, 沈文雄編『金鼎隨筆叢書 自然科學家輯 看風雲舒卷』百花文藝出版社, 1998年. 414p.

- 34) 任美鏗「徐霞客對世界岩溶學的貢獻」『地理學報』1984-9, 252-258.
- 35) V. K. Ting "Notes on the Records of Droughts and Floods in Shensi and the Supposed Desiccation of Northwest China", *Geografiska Annaler*, 1935. Vol.14, 453-462. (丁文江「陝西省水旱災的記錄與中國西北部乾旱化的假說」『方志』第9卷 第2期, 98-104. 1936 原出, 黃, 藩, 謝編『丁文江選集』1993. 189-195.).
- 36) Co-Ching Chu "Climatic Pulsation during Historic Time in China", *The Geographical Review*, 1926. Vol.16, No. 2. 274-282.
- 37) 竺可楨著,《竺可楨文集》編輯小組編『竺可楨文集』科學出版社, 1979年. 527p.
- 38)《竺可楨傳》編輯組編『竺可楨傳』(國家自然科學基金資助項目)科學出版社, 1990年. 369p.
- 39)中國社會科學院近代史研究所近代史資料編輯部編『近代史資料』總86號,中國社會科學出版社, 1994年. 284p.
- 40) V. K. Ting "On the Stratigraphy of the Fengninian System" *Bull. Geol. Soc. China*, 1931. Vol.10, No. 2. 31-48 (丁文江「論豐寧系地層」,黃,藩,謝編『丁文江選集』1993. 147-157.).
- 41) V. K. Ting "The Fengninian Series in Kueichow" *Bull. Geol. Soc. China*, 1930. Vol. 9, No. 2. 95-96. (丁文江「貴州地質建造之劃分」,黃,藩,謝編『丁文江選集』1993. 145-146.).
- 42) 章鴻釗著,前田隆良,熊谷喜之訳『支那地質學發展史』(『中國地質學發展小史』商務印書館1937)人文閣,1943年. 213p.
- 43) 賈蘭坡·黃慰文著,北京外文出版社·日本經濟新聞社共同編集,『北京原人匆匆來去』日本經濟新聞社,1984年. 335p.
- 44) 黃秉維著,《黃秉維文集》編輯小組編『自然地理綜合工作六十年—黃秉維文集』科學出版社, 1933年. 503p.
- 45) 竺可楨,宛敏涇『物候學 增訂本』科學出版社, 1980年, 175p.
- 46) 丘寶劍「關於中國熱帶的北界」『地理科學』1993-11, 297-306.